絶望の扉

鳥居なごむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶望の扉

【Ｎコード】
Ｎ１１１２Ｓ

【作者名】
鳥居なごむ

【あらすじ】
ある日、まるで雲のように白くて巨大なクジラが空から落ちてきて世界は一変した。かつて砂漠と呼ばれた地域に緑が生い茂り、総面積の三分の二を占める海からは新たな大陸が浮上する。この異常現象によって生態系は大きな影響を受けた。原因究明を急務とした各国の調査隊は各地で様々な未確認生物を発見する。さらには空想上の生物とされていた巨大爬虫類――竜の存在も確認された。災害ならぬ竜害によって人口は激減、特に竜迎撃用の軍事力を持たない途上国は壊滅的な被害を受ける。世界は統一国家として超常現象対

策局を設立。生き残るのは竜か人類か？　壮絶な生存競争がここに開幕する。【本編は二人の主人公視点で進行します。誤字・脱字・誤植があれば指摘して頂けると幸いです】

零話

ある日、まるで雲のように白くて巨大なクジラが空から落ちてきて世界は一変した。

総面積の三分の二を占める海からは新たな大陸が浮上し、かつて砂漠と呼ばれた不毛地帯は新種の緑が生い茂り密林へと姿を変えている。この異常現象によって生態系は大きな影響を受けていた。

「……これで何種類目でしたっけ？」

防護服に身を包んだ若い調査員が嘆息を漏らした。小雨の降り注ぐ密林地帯には二つの影がある。傍らに立つ初老の調査員は最新型の双眼鏡を覗き込んだまま苦笑した。

「まさに未確認生物の展覧会だな。実在の可能性を追求していた時代が懐かしいよ」

「確かに野良犬や野良猫を見つけるような感覚で絶滅危惧種や未確認生物が発見されるのは異常事態ですよね。あの『ホエール・インパクト』を境にそれまでの常識が通用しなくなりました」

「だからこそ新しい常識を作るために我々が存在する」

初老の調査員は双眼鏡から視線を外した。若い調査員が晴れやかな表情を浮かべる。

「そうですよね！　一刻も早く原因を究明して、人類がどう対応すべきか検討する必要があります。クジラ衝突が惑星にどのような損害を与えたのか、それも非常に重大な課題になってくると考えられますよね」

「秋山くん、もし惑星にとって人類が有害だとしたらどうする？」

意外な質問に若い調査員は押し黙る。ややあって重い口調で言葉を絞り出した。

「もし人類が有害であったとしても、惑星と共存していく道は存在するはずです」

「そうだな。私もそう考えている」

そこへ武装した調査員が戻ってくる。一個分隊で構成された先遣隊は迷彩服に戦闘用長靴という格好をしていた。さらに各々が種類の違う武器を所持している。同じ調査員でも研究職である二人とは異なり、凶暴な野生動物や未確認生物から身を守るために編成された部隊だった。

「第六部隊がＦ地区七三五に位置する洞窟で新種の卵を発見したそうです。カプセル型で直径五十センチ程度ということですが……先生方はどうされますか？」

「もちろん同行させてもらうよ。周辺の環境も調べておきたいからね」

武装した分隊に守られながら二人は熱帯雨林の中を進む。高さ五十メートルにも及ぶ樹木を筆頭に、複数の層が重なり合わさることで密林が形成されている。その中にはコンクリートの建造物を貫いて生長しているものもあった。かつて栄光を極めた文明が朽ち果てたかのような情景である。集団による移動は思いのほか順調だった。なぜなら濃い植生で日光が遮られるため、地表付近の草は非常に育ちが悪く、これによって大型動物の歩行に適した地形が構築されているからだ。

「ここです」

武装した調査員が到着を告げる。洞窟の周辺は先客の部隊で賑わっていた。

「随分と集まってますね」

「研究者は新種という言葉に弱いからな」

初老の調査員は自嘲的な笑みを浮かべる。これには若い調査員も苦笑で応じるしかない。二人は足元に気を配りながら洞窟へ潜入した。奥では複数の研究者が卵を囲んで議論を飛ばしている。報告通りカプセル型の巨大な卵だった。

「なにかわかったことは？」

「それがまったく」

先行していた調査員の一人が首を横に振った。様子からしてお手

上げ状態らしい。
「拝見してもよろしいかな?」
「もちろん」
後発組の二人は道を譲ってもらい最前列へ進む。次の瞬間――小さな音を立てて卵に亀裂が走る。洞窟内に嫌な静謐が訪れた。衆人環視の中で卵は割れ目を増やしていく。見守る調査員も緊張で手に力が入る。人類に有害な生物が誕生するかもしれないという不安もあった。どれくらい経ったのだろう。孵化に成功した生物がその姿を現した。その場に居合わせた全員が息を飲む。誰かの「……なんだこの生物は?」という第一声をきっかけにどよめきが湧き起こった。未確認生物の実在が連日報告される中で、このような出来事が発生するのは稀なことである。
「卵が先か鶏が先かという命題において、今日ほど卵が先であってほしいと思ったことはないな。もし卵を産んだ親が存在するとしたら、我々人類は早急に対策を練らなければならない」
初老の調査員は深刻な状況に口を引き結んだ。洞窟内に再び沈黙が訪れる。
孵化したのは空想上の生物とされていた巨大爬虫類――竜の子供だった。

一話

騒音を撒き散らしながら揚力を得た回転翼機が中空へ浮上する。
「あのー、どうして僕が現場に出向かないといけないのでしょうか？」
僕は回転翼機の端で膝を抱えながら当然の疑問を口にした。反対側の壁に背を預けた大柄な黒人が顔を上げる。ドレッドヘアでフォーマルな背広姿に強襲用狙撃銃装備という異様な格好をしているので目を合わせたくない。
「珍しい奴だな。これまでの研修生は反対されても現場への同行を志願したものだ」
「僕は――どうして世界がこうなってしまったのか知りたいだけです。興味本位で現場へ赴きたがる研究員と一緒にしないでください」
「威勢がいいのは構わないが舌を噛むなよ」
大男は苦笑を漏らしながら手にした強襲用狙撃銃の整備へ戻る。
そこそこ広い機内には操縦士を除いて四名が搭乗しているのだけど、僕以外の三名は資料の確認や装備の点検に余念がない。しかも二名は女性だ。一人は黒チャイナドレス姿の女性で複数の自動拳銃を整備中。もう一人はどう見ても少女と呼ぶべき年齢で、ブレザーの上にクリーム色のカーディガンを羽織っている。短機関銃と対物ライフルを所持しながら資料に目を通していた。研究職である僕の知識不足かもしれないけど、とてもこれから戦場へ向かう格好とは思えない。
「ところで標的のランクは？」
黒チャイナ服の女性は武器を整備しながら言葉を紡いだ。資料を読み込んでいた少女が視線を上げる。しかし質問に応じたのは大柄な黒人だった。
「Eランクだ。最悪だが――三人で討伐できる範囲だろう」
「正気？」と質問者は怪訝そうな表情を浮かべる。

「それならシェリルが怜司と合流できることを祈るんだな」と大柄な男は肩をすくめた。
「ここは本当に糞っ垂れの巣窟だね」
黒チャイナ服の女性は言葉を吐き捨てる。腰まである長い黒髪が無造作に揺れた。
「そんな糞っ垂れでも役に立てる世の中になった」
「……それ笑える」
二人の視線は窓の外へ向けられた。それに釣られて僕も回転翼機から外界を一望する。荘厳な景色が眼下に広がっていた。あの日――まるで雲のように白くて巨大なクジラが空から落ちてきて世界は一変したのである。かつて砂漠と呼ばれた広大な不毛地帯は緑に覆われて密林へと変貌した。そのほとんどが未確認植物で形成されていて、政府発足の超常現象対策局調査部が解明に当たっている。
「秋山涼だったな。気乗りするしないは本人の都合で構わないが、任務を遂行して無事帰還するまでは俺の指示に従ってもらう」
名前を呼ばれて僕は窓から機内へ視線を戻した。ドレッドヘアの黒人――マーキス・ウォーレンが有無を言わせない表情で返事を待っている。配属前に資料を拝見しているので、この部隊を構成する局員の名前も誰が隊長かも把握している。
「役に立てるとは思いませんが、迷惑をかけるつもりもありません」
「身勝手な行動さえ起こさなければそれでいい」
「いくら人材不足とはいえ、糞の役にも立ちそうにない高校生に手を出すなんてね」
僕を一瞥した黒チャイナ服の女性――天宮千秋は不敵な笑みを浮かべる。喋らなければ綺麗なお姉さんという事前に仕入れた情報はどうやら本当らしい。
「優秀な研究員を早い段階から育てようという判断は間違っていないさ。それとも世界政府発案の研修制度に文句をつけたいのか？」
「まったく、うちの隊長は頭が固い。新人を茶化すのは七課の恒例行事だろ？」

殺伐とした雰囲気の中で、仲が良いのか悪いのか判然としない会話が繰り広げられている。僕は改めて機内を見回した。学生服の少女に黒チャイナ服の女性、さらにドレッドヘアでスーツ姿の黒人と専用の制服を着ている女操縦士、そこへブレザーの上に研究員用の白衣を羽織った僕である。いかがわしい店の待機室にしか見えない。もちろん異常な存在感を示しているマーキスさんは嬢が逃げ出さないための監視役である。

「マーキスさん、この際はっきりと言わせてもらってもいいですか？」

「なんだ？」

「これから戦場へ赴くんですよね？」

「さっきの話を聞いていなかったのか？」

疑問文に対して疑問文が返ってくる。僕は意を決して本題に触れた。

「それが戦闘を行う格好なんですか？」

「紳士たるものスーツにネクタイという組み合わせは譲れない。それにこれはバラ系全芳香族ポリアミドと呼ばれる繊維を圧着積層して作られた防弾防爆仕様だ」

ぐうの音も出ない。趣味の領域を完全に超えていた。

「私のは普通のチャイナドレスだけどね。朝起きたらシェリルから連絡があって『チャイナドレス姿の千秋姉様だけは見たくありません』って泣きつかれたんだよ。あまりに鬱陶しいからチャイナドレスを着てきたのに運のいい奴め」

悔しそうに舌打ちする千秋さんだった。ここは忠告しておいたほうがいいのかもしれない。

「……それ古典の饅頭怖い的に騙されてるんじゃないですか？」

「なんだお前、饅頭が怖いのか？」

千秋さんは綺麗な瞳をぱちくりとさせた。憎めないというか残念な人だな。

ともあれ閑話休題。

「ところで、さっき話に出ていたシェリルさんと怜司さんってどんな方なんですか？」

本来なら分隊でも八名必要なのだけど、下位の部署では定員割れを起こしているケースが少なくない。なんらかの理由で別行動しているにしても、合流せずにEランクの竜と対峙するのは無謀だろう。だからこそ探りを入れておかなければならない。

「存在する価値もない男×筋金入りの変態女かな」と千秋さん。

「しかも負×負が正にならない不思議な存在だ」とマーキスさんが補足する。

絶句するしかない。僕は生まれて初めて明後日の方向へ逃げ出したい気持ちに駆られた。しかし現実逃避は最終手段なので、なんとか二の句を継ごうと思考を巡らせる。

刹那――轟音と衝撃が回転翼機を襲った。機体は大きく揺れて銃火器を散乱させる。突然の出来事に僕は派手に床を転がったけど、ほかの搭乗員は壁に設置されている取っ手を掴んで身体を支えていた。混沌とした状況の中で最初に口火を切ったのはマーキスさんだった。

「西方向、機体の斜め下だ！」

聞き終えるが早いか千秋さんは窓の外へ視線を送った。学生服の少女――彩吹マドカも同様の行動を取る。回転翼機は大きく傾いたまま高度を下げていく。明らかに機体のどこかを損傷している動きだった。

「緊急着陸します！　援護を！」と叫ぶ女操縦士の声が機内に響いた。

「いつから墜落を緊急着陸と呼ぶようになったんだ？」

極限状態でも皮肉を忘れないのが千秋さんだった。しかし行動は驚くほど早い。命綱となるベルトを手早く腰に巻くと、そこから両肩へかけてV字に伸びた安全具を瞬時に装着。機内に散乱している武器の中から五十口径弾を装填できる対物ライフルを手に取った。次いで目配せを受けたマーキスさんが回転翼機の扉を開放。安定し

ない足場に身体を伏せてチャイナ服の女性は銃口を外へ向けた。位置関係の都合で僕の視界にスリットから食み出した白い太股が映り込む。慌てて視線を上げると扉の向こう側で討伐対象が悠然と中空を舞っていた。

空想上の生物とされていた巨大爬虫類――竜だ。頭部から尻尾までの全長が推定十五メートル、体重は推定十二トン前後で黒色の鱗に全身が覆われている。長い首の先に鰐のような顔が鎮座。前肢と後肢のほかに背中から蝙蝠のような翼を生やした黒竜だ。資料と隊長の説明によればEランク。これは各地の目撃情報と被害状況を基に算出された竜個体の強さを表す指標で、現在の世界基準ではランクから討伐部隊の人員や装備などが割り出されている。

降下する回転翼機と並行飛翔していた黒竜の軌道が変化。どうやら二度目の攻撃に移ったらしい。狙撃のタイミングを計っていた千秋さんが妖艶な笑みを浮かべて引き金を絞る。銃声――発砲された五十口径の弾丸が中空を舞う黒竜の眼球を捉えた。

「グォオオオオッ！」

角膜と水晶体を抉られ片眼の視力を失った黒竜が暴走。直接の体当たりこそ免れたものの、鞭のような尻尾が機体の側面に直撃した。激しい衝撃とともに回転翼機は弾き飛ばされる。反動で開け放たれた扉へ僕と千秋さんが引き込まれた。あわやコードレスバンジーを決行という寸前で、扉付近に陣取っていたマーキスさんが僕の身体を支えてくれる。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます」

黒人の大男は身体を反転させて僕を操縦席側へ移動させる。その手際に一切の無駄がない。次いで安全ベルトに体重を預けている千秋さんを叱責した。

「この至近距離で眼球を狙う奴があるか！　暴走した竜と激突していたら爆発炎上あるいは機体損傷で地面への追突どちらにしても全滅だったぞ！」

「私は一撃必殺が好きなんだよ。それに無計画に発砲したわけじゃない。この損傷した機体でEランクと空中戦を演じるのは不可能だろう？」

それを理解していないマーキスさんでもなかった。悪態を吐きながらも本気で咎めるつもりはないらしい。ただ指揮官として基本戦術を無視できないだけなのだろう。

「マドカ、シェリルたちと連絡は取れたか？」

「……繋がらない」

矛先を向けられた少女は小さく首を左右に振った。手には電話の子機を一回り大きくしたような衛星通信機が握られている。僕は同年代と思われる彩吹マドカを観察した。耳を隠す程度に伸びた色素の薄い髪。やや外に跳ねているのは寝癖なのかお洒落なのか判然としない。感情を表に出さないタイプらしく、この非常時でも顔色一つ変えていなかった。

「マーキス、悪いけど連絡についての雑談は後回しが良さそう」

「……糞っ垂れ」

後方を確認したマーキスさんが舌打ちする。そこには回転翼機を猛追してくる黒竜の姿があった。片眼を失くした所為で飛行が随分と乱れている。

「降下ポイントを発見！　これより高速進入着陸を開始します！」

女操縦士は四度の進入角で最終経路へ向けて機体を降下させる。しかし飛行速度で圧倒的に上回る黒竜を振り切ることはできない。千秋さんが身を乗り出すようにして後方へ牽制射撃。音速を超える弾丸が黒竜の左翼に命中。黒い鱗が剥がれて白っぽい肉を露出させた。

「グォオオオオッ！」

黒竜は咆哮しながら軌道を変えて上昇した。千秋さんは対物ライフルを構えたまま動かない。七課第一部隊の狙撃手は命中率の低い無駄弾を極度に嫌う傾向があるらしい。状況の把握を急ぐマーキスさんが扉から顔を出して上空へ視線を送る。

「見逃してくれるつもりはないらしいな」
「不用意な接近は危険と判断したんだろう。怒りで我を忘れてるかと思えば、今度は利口な一面を見せ始めた。厄介なことにならなければいいけどね」
千秋さんはマーキスさんを見上げて一瞬だけ片目を閉じる。黒人の大男は盛大に嘆息を漏らした。女操縦士の指示が機内に広がる。
「これより急減速動作に入ります」
合図から数秒後、機体姿勢が大きく変化した。女操縦士はコレクティブピッチレバーとラバーペダルを巧みに操作して進入角と機首方位を維持。着陸ポイントの二メートル上空でホバリングに成功した。無事に着地。ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、二十キロを超える携帯式地対空ミサイルを担いだマーキスさんが先陣を切る。降機して遥か上空の黒竜を目視すると発射機を構えて標準を合わせた。
「アディオス」
ロックオン後にミサイルの格納された筒を射出。一定の距離を確保するとロケットブースターに点火。超音速まで加速したミサイルが空を舞う黒竜に襲いかかる。着弾して爆発。巨体が大きく揺らいだ様子は地上からでも確認できた。
「グォオオオオッ！」
数瞬の間を置いて空から血の雨が降ってくる。返り血を浴びながらマーキスさんは高熱の発射機に次弾の装填をしていた。完全に捉えられなかったのか黒竜に致命傷を与えることができなかったようだ。遅れて降機した千秋さんとマドカが対物ライフルを上空へ向けて構える。逃亡を図る瀕死の獲物に一斉射撃が開始された。
「グォオオオオッ！」
高度を下げながら滑空する黒竜。マーキスさんは腕を水平に伸ばして射撃を制した。
「仕切り直しだ。地対空ミサイルの目視可能圏外に逃げられた」
「あらー、ごめんなさいね。私がマーキス並みの怪力なら詰んでた

わけだ」
　対物ライフルを下ろしながら千秋さんは軽口を叩く。なにも答えずマーキスさんは発射機を地面に置いた。回転翼機の中から一部始終を見ていた僕は、今になってようやく、尋常ではないくらい身体が震えていることに気付いた。
「反省会は黒竜を片付けてからだ。俺は回転翼機の点検と整備を担当する。千秋とマドカは情報収集を頼む。黒竜の落下地点の推測と本部への連絡は必須事項だ」
　ドレッドヘアの大男は右手を前に突き出した。隣にいた学生服の少女がその上に右手を乗せる。気だるそうにチャイナ服の女性も右手を合わせた。
「研修生と操縦士はどうするわけ？」
　そう言って千秋さんは回転翼機内を見やる。円陣みたいなことをやろうとしていることは理解できたので、僕は白銀の髪を後ろで結わえた女操縦士を連れて降機した。
「追撃よりも大事なことなんですか？」
　僕は率直な意見を述べた。傍らの女操縦士も不思議そうな顔をしている。
「七課第一部隊のお約束でね。戦闘前にこれをやるのが決まりになってるんだよ」
「そういうことだ。ほかの連中の真似で構わない」
　促されて僕と女操縦士は右手を差し出した。その上からマーキスさんが左手で挟み込む。
「これは任務が終わるまで絶対に仲間を見捨てないという意思表明だ」
　苦手な体育会系思考だけど、まあ、この世界ではそんなことを言っていられない。
「それじゃあ、その任務とやらに取りかかりますかね」
「あの、アタシは一体なにをすればいいのでしょうか？」
　散会する前に白銀髪の女操縦士が質問を投げかけた。どうも他人

行儀な気がしていたのだけど、その理由は僕が名前を知らないことに起因しているらしい。
「研修生の話し相手とか？」
くくくと邪悪な笑みを浮かべながら千秋さんは立ち去っていく。
マドカは黒竜の血液を採取し始めていた。発射機を担ぎ直したマーキスさんが女操縦士に言葉を投げかける。
「悪い奴じゃないんだが少しばかり性格が破綻しているんだ。それに思わぬ足止めを喰らったのも事実だからな。この時間を利用して互いの自己紹介を済ませておくといい。ああそれと――さっきの高速進入着陸は見事だったな。これからも七課第一部隊の正操縦士としてやってもらいたいくらいだ」
空いた左手を掲げて大男は回転翼機へ向けて歩き始めた。残された僕と女操縦士はどちらからともなく顔を見合わせる。聞かされたばかりの意外な情報に驚きを隠せなかった。
「あなたも今日から七課に配属されたんですか？」
「副操縦士のジェシカ・キャンベルと言います」
「研修生の秋山涼です」
「よろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
「なんか外国語の教科書みたいな会話ですね」
次の瞬間、僕とジェシカさんは同時に吹き出していた。

二話

ある朝の出来事。

「おい、大丈夫か？」

ぼんやりとした思考に野太い声が響いた。頭が割れるように痛い。制服の上からエプロンを着けた可愛らしい妹に起こしてもらう予定が、どういうわけか聞いたこともない中年男の低い声で目覚めさせられてしまう。これが悪夢でなかったら世の中に悪夢など存在しないだろう。そんなわけで俺は生返事を返しながら二度寝することにした。

「大丈夫だ。問題ない」

「そこだと邪魔になるから脇へ移動してもらっていいか？」

どうも様子がおかしいので、俺は重い瞼を開いて周囲を見回した。瞳に射し込んでくる陽光を右手で遮りながら冴えない頭で現状把握に努める。眼前には作業服の中年男が立っていた。ほかにも数人の作業員がいて、周辺のゴミ袋を車両に放り込んでいる。それら袋の山の一角に俺は横たわっていた。なるほど邪魔者扱いされても仕方がない。這うようにして移動すると、作業員たちが残りのゴミ袋を片付け始める。

「これでも飲んで目を覚ましな」

中年作業員が水の入ったペットボトルを地面に置いていく。しばらくすると独特の音を奏でながら作業車が駆動する。喉の渇きを潤すために俺は封の切られていないペットボトルに手を伸ばした。一気に飲み干して今度は立ち上がる。軽い立ち眩みを起こしたので電柱に背を預けて重たい身体を支えた。改めて周囲を確認すると近所のゴミ捨て場だった。

「午前九時か……どう考えても間に合いそうにないな」

俺は携帯を取り出そうとジーンズのポケットを探る。中は空だった。次いで上着を調べてみるが結果は変わらない。仕方なく近場の

公衆電話まで歩いた。携帯の代わりに見つけた小銭を投入して手馴れた番号にかける。

「俺俺……そう俺だよ。ああ……そうだね。優真だよ……うんうん。え？　優真は三年前に亡くなった？　死んでもたまには連絡くらいするさ。俺は婆ちゃん子だからね。大丈夫大丈夫。死んだら連絡しちゃいけないなんて法律はないからさ。そうだね……実は頼みたいことがあって連絡したんだ。うん？　違う違う。それはないよ。えっと……とても言い難いことなんだけど……え？　さっさと言いなさい？　わかったよ。要約すると寝坊したので遅刻します」

「長っ！　なんやのんその電話連絡！」

思わぬ突っ込みを受けて俺は声のする方へ振り向いた。怪しげな黒装束を身に着けた少女が立っている。白い布のようなカチューシャを頭に乗せて、長い金色の髪は触角みたいな二つ括りで後ろへ伸びていた。有体に表現すると二次元的な格好をしている。

「俺の電話連絡はいつも長広舌なんだよ。それよりシェリルはこんなところでなにをしているんだ？」

「隊長にＵＭＡさんを迎えに行くよう頼まれてん」

のほほんとした柔らかな口調が返ってくる。勢いだけで喚き散らす関西弁とはまるで異なり、ふわっとした可愛らしい印象を受けるのが逆に腹立たしい。

「とりあえず俺を未確認生物みたいに呼ぶな。ちなみに優真は俺俺詐欺用の仮名だ」

軽口を返しながら俺は状況を理解した。冴えない思考でも培ってきた経験は嘘を吐かない。おそらく朝っぱらから竜害警報が発令されたのだろう。そうでもなければ俺を必要とする理由が世界中を探しても見つからない。

「緊急招集か？」

「Ｅランクの黒竜が街を半壊して根城にしてるらしいねん」

「少ない戦力をさらに分けて大丈夫なのか？」

俺は率直な不安を口にした。シェリルは愛らしく小首を傾げる。

「合流するまで竜の捕捉だけするんちゃうかな？」
「俺たちが到着するまで竜が大人しくしてくれればいいけどな。でもまあ、マーキスに遅刻を怒鳴られるのも癪だから喰われて尻の穴から糞として排出されていたほうが助かる」
　下劣な発言をすることで思考力も回復してきた。俺はシェリルの後方に停めてある排気量一二〇〇？の大型単車を見やる。可愛らしい装飾が施された特撮のヒロイン仕様になっていて、これで移動するとか嫌がらせを通り越した罰ゲーム以外の何物でもなかった。
「ところで、その格好で単車に乗ってきたのか？」
「えへへ、似合てるかな？　実は月刊『萌えキャラット四月号』に掲載されてたアビルちゃん限定仕様ゴスロリ服やねん。数量に限りがあって入手困難になってるらしいよ」
　くるりと一回転して微笑むシェリルだった。紳士の俺は無視したい衝動を抑えて話を合わせておく。
「大切なメイド服を戦場に着用してきて大丈夫なのか？」
「ふっふっふっ、ちゃんと手は打ってあるねん」
　少女は意味深な笑みを浮かべながら右手の人差し指をメトロノームのように左右に振った。どうでもいい話だが最後まで聞いておいたほうがいいだろう。俺は大仰に肩をすくめながら語りたがり屋に先を促した。
「使う用と保存用と布教用と合計百五十着ほど買うてん」
「三着じゃねえのかよ！　というか入手困難になった原因はお前だ！」
「ところでＵＭＡさん、頬に貼ってあるシールはなんやのん？」
　指摘されて俺は頬を撫でる。指先に触れたシールをとりあえず剥がした。
「ゴミ処理券と書いてあるな」
「ＵＭＡさんのサイズやと三百円の券一枚じゃ処理してもらえへんねんな。左右の頬と額に三点貼りしといたら運んでもらえるんやろか？」

「まず俺をゴミという前提で話を進めるな。分類学や生物学の文献を読む限り俺は動物界脊索動物門脊椎動物亜門哺乳網霊長目真猿亜目狭鼻下目ヒト上科ヒト科ヒト属ヒト種に属している」
「せやけど千秋姉様がＵＭＡさんは存在する価値もないゴミや言うてたよ？」
大真面目な顔で反論する少女だった。さすがの俺も苦笑するしかない。
「千秋は『以上を持ちまして愛の告白と代えさせて頂きます』という言葉をよく付け忘れるからな。それと地味に傷付くから陰口は本人に伝えない方向でお願いします。俺の心は清らかな薄氷か世界一脆い硝子で覆われているに違いないからな」
「とにかくＵＭＡさんはゴミやないってことでええんかな？」
「あんまり声を大にして言うことじゃないけどな。あと俺の名前は怜司ね」
さり気なく本名を忍ばせたのは優しさである。しかしシェリルは追求の手を緩めない。俺はやれやれという風に肩をすくめることしかできなかった。
「それやったらなんでゴミ処理券を貼られて捨てられてたん？」
「大人になればゴミと間違われて捨てられることも週に一度や二度はあるさ。ところでシェリルは『働き蟻の法則』を知っているか？
蟻の集団は大きく分けて『よく働く蟻』二割と『普通に働く蟻』六割と『働かない蟻』二割で構成されている。この『働かない蟻』というのは『よく働く蟻』に対して劣等感に苛まれる『普通に働く蟻』の優越感を充たすために存在する貴重な存在なんだ。つまり俺が存在することで七課の連中は生きていられると言っても過言ではない。要約すると国家は俺を保護すべきだと思うね。あるいは世界的富豪の役員報酬がなんらかの手違いによって俺の口座へ振り込まれるようにするべきだな」
「ウチの聞いた『働き蟻の法則』となんかちゃう。それに最後はただの願望やん」

どうやら騙し切れないらしい。騙し切れるとも思ってなかったけどな。

「ともかく仕事へ向かおう。これ以上減給されるとコンビニでアルバイトしていたほうが高給というレベルに達するからな」

「現場へ直行しろ言われてるねん。萌え萌えダビッド三号の出番やね」

黒装束の少女は誇らしげに愛車を見やった。俺はすぐに確認する。

「萌え萌えダビッド三号って語尾に『もっきゅ～ん！』とか付ける糞ナビシステムのことか？　しかも百回に一回くらいの割合で『ふも～っ♪』とか言うんだよな」

「レア語尾は『ふも～っ♪』やなくて『ふもっふっ♪』やね」

真顔で訂正されても応対に困る。ともかく俺は大型単車に近寄り糞ナビで入力済みの目的地を確認。どうやら萌え萌えダビッド三号を使わなくても問題なさそうだ。

「ここならナビなしで問題ない。シェリルが後部座席でいいか？」

「丁寧に扱えるんやったら構へんよ」

糞ナビの電源を落として俺は運転座席に腰を下ろした。エンジンを始動させてアクセルを吹かせる。後部座席に横乗りしたシェリルが俺の腰にしなやかで強靭な鞭を連想させる腕を絡ませた。

「振り落とされるなよ」

「あいさ」

返事を聞くが早いか俺は大型自動二輪を駆動させる。分厚いタイヤがアスファルトを咬んで加速。数秒で最高速に達した単車は大通りを強靭な豹の如く疾駆していく。法廷速度を大幅に違反しているが、竜害警報発令時の竜討伐部には免責特権が与えられている。途中で高速道路へ上がると、俺は華麗な運転技術で先行車を追い抜いて行った。無駄話に費やした時間をここで盛り返しておく。

二時間半で目的地近郊に到着した。まるでゴーストタウンのように静まり返っている。見慣れた光景とはいえ薄気味悪さは簡単に払拭できない。

「ここからは警戒したほうがいいな」
「避難区域やからね」
竜害警報が出ると普通の感覚を持った人は地下シェルターに逃げ込むか区域外へ避難する。反対に集まってくるのは自称写真家という変な連中で、生の竜を撮れる貴重な機会だと遠くから足を運んでくるらしい。竜害が蔓延した初期はともかく、対抗手段が確立された現在では、竜と人間は緩衝区を挟んで住み分けているからだ。つまり竜害の大半は緩衝区に指定されている地方で発生し、信じ難い話だが大都市の生活はホエールインパクト前と大きく変わらない。
「回転翼機が墜落して俺たちのほうが早く現場へ着く可能性ってあると思うか？」
「縁起でもないこと言わんといてくれへん？　専用回転翼機が無くなったら明後日の即売会に参加できへんなるやん」
「まずは三次元の仲間を心配してやれよ」
「あの人たちは殺しても殺し足らへん」
「どんだけ嫌いなんだよ！」
とりあえず突っ込むしかなかった。すぐに後部座席から反省の声が漏れる。
「ちゃうねん、殺しても死なへんて言いたかってん」
「気にするな。俺も去年クリスマスパーティーに呼ばれなかったときは軽い殺意と本気の疎外感を覚えたものさ。あれは『俺の幸せが二十年前から行方不明なので捜索してください』と警察へ届け出たとき以来の疎外感だったな」
ちみなにタクシーの運転手に行き先を聞かれて「人生をやり直せる場所まで頼む」と告げたら「二酸化炭素削減のために酸素を吸い込んで二酸化炭素を吐き出す行為をやめて頂けますか？」と頼み返された。危うく人生から退場するところだった。
「あれ、そうやったっけ？　千秋姉様のミニスカサンタ姿を見て『千秋氏の生足は最高ですなー』とか言いながら写真撮ってへんかった？」

「それは俺らしさを微塵も感じさせない俺だな。つまり俺じゃない。というか、そこまであからさまに怪しい奴をなんで追い出さないんだ？」

「せやけど『ぼ、僕は怜司なんだな』って言うてたよ？　しかも存在する価値がないとこらへんが激似やったから騙されたんかもしれへん」

「その判断基準をなんとかしろよ」

俺たちは速度を緩めた単車で無人の街を抜けていく。しばらくすると、なにか動く影が見えたというシェリルの指示で停車した。命の価値が随分と安くなったとはいえ、それでも人命が最優先されるのは今も昔も変わらない。

「逃げ遅れた人か？」

「どうなんかな。ただ一つやなくて複数見えてん」

「家族で逃げ遅れたのか？」

「わからへん。せやけど危機的状況にあるんは間違いなさそうやわ」

少女の声音が戦闘員のそれに変わる。俺はシェリルの視線を辿り身体を捻って真正面へ向き直した。二メートル程度の二足歩行型小竜が三匹も視界に映る。巨大な蜥蜴のような容貌は怖ろしいというより気味が悪い。分類に従えば最低のGランクだが、それでも装備が整っていなければ強敵だ。

「シェリル、なにか武器は？」

「単車のサイドバックに自動式拳銃が二丁と私の服の中に短機関銃が一丁」

俺は戦闘用の思考に切り替える。最善と導き出した方法を提案した。

「どうせ無人だ。短機関銃で一掃するのが手っ取り早いな」

「せやけどGランクって無害やったら討伐対象外なんちゃうん？」

「あの涎を垂らしながら食料を物色するような態度から、まさかの名刺交換でもしてくれるっていうのか？　そんな確率は俺とマーキスがＢＬするより低いわ！」

「そんな――千秋姉様の命令でＵＭＡさんとマーキスさんが愛し合う内容の薄い本を夏までに仕上げる予定が狂うやん」
「ノンフィクションとか笑えなさ過ぎる。せめてフィクションで頑張れ――いや、やっぱり頑張らなくていい」
そろそろ悪ふざけを終える必要があるだろう。俺は神妙な口調で語を継ぎ足した。
「ついでに言っておくと、いつ親竜と遭遇してもおかしくない危機的状況だ。こいつらが親離れしているとは思えないからな」
刹那――均衡状態が崩れた。三匹の小竜が猛然と襲いかかってくる。俺は単車を緊急発進。シェリルは右腕一本で身体を固定。左手でフリルスカートの中から短機関銃を取り出し乱射――綺麗な弾幕を張るが小竜たちは怯まない。むしろ中途半端に闘争本能を刺激した印象を受ける。俺は小竜と一定の距離を保ちながら叫んだ。
「当てる気あるのか！」
「騎馬が悪いねん！　掴まってんのが精一杯で標準なんか合わせる余裕あらへん！」
「俺の専門は機器系統だからな」
言いながら俺は単車を左へ旋回。真後ろにいた標的が半身乗車のシェリルの正面に展開する。新たに放たれた弾幕が小竜の肩口や腹部へ命中。外れた弾丸はアスファルトを削り甲高い音を立てる。
「ギィイイイイッ！」
悲鳴を上げて小竜の一匹が転倒。残り二匹が怒りに任せて追撃してくる。しかしＧランクの小竜に遅れを取るほど間抜けではない。左へ旋回しながら確実に殲滅を狙う。銃撃音と排出された空薬莢の落下音が狂想曲を奏でる。数分後、目標の沈黙を確認してから俺たちは単車を降りた。短機関銃を所持したシェリルが周囲を警戒する。
「小竜の画像を本部へ送信だな。こいつらのおかげで正当な遅刻理由ができたのはありがたい。丁寧に埋葬するよう伝えておいてやるかな」
「野生の小竜が緩衝区で見つかるてどういうことなん？」

「前例がないわけじゃない。世の中には竜を飼育したがる馬鹿も多いんだ。ともあれ連絡を済ませたら部隊と合流しよう」
「あ……今気い付いたんやけど部隊から着信入ってる」
携帯を小さく掲げながらシェリルは頭を小突いた。俺はやれやれという風に肩をすくめる。こういうときは軽口を叩いておくべきだろう。
「まだ糞になってないらしいな。ともかく連絡を入れ直したほうがいいだろうね」
「了解」
シェリルが通信を開始した。俺はジャケットの内ポケットから煙草を取り出して火を点ける。紫煙を吐き出しながら空を見上げた。毎日のように最悪の出来事を更新し続けている。それでも生きている理由はなんなのだろうか？
とりあえず――そんな哲学的な思考を巡らせている演技をしておいた。

三話

回転翼機を修繕するマーキスさんの仕事ぶりを眺めながら、僕はジェシカと近場の岩に腰を落ち着けて仕事の話をしていた。名前や経歴という簡潔な自己紹介を終えると当然の流れでこうなる。初対面で共通した関心事となれば選択肢は限られていた。

「第一部隊の正操縦士はシェリルさんなんですよ。アタシはまだ見習いで副操縦士として空きのある部隊を転々としているんです。なので七課とも多少の面識があったりなかったりします」

「討伐部って変わり者が多いの？」

人種によって年齢が曖昧だったりするのだけど、同世代だとわかれば気兼ねする必要もないだろう。あとは副操縦士が馴れ馴れしい態度に気分を害さないことを祈るだけである。

「うーん、一課から三課は各国の専門部隊が配属されているので規律に忠実な方が多い印象ですね。反対に四課から七課は討伐部発足時の名残があるので変わった方が多いのかもしれません」

ジェシカは二十五年前に起こったホエールインパクトを想像しているのか遠い目をしていた。僕も父から当時の様子を克明に聞かされている。形振り構っていられない世界政府は「英雄求む」と大々的に広告を出して命知らずの連中を集めた。素人の民間人を討伐部に多数登用し、竜討伐の最前線に立たせたのである。その結果、有効な戦術が確立されるまで多くの犠牲者を出した。マスコミは「捨て駒作戦」と政府を痛烈に批判したけど、誰かがやらなければならないことだと誰もが理解していたに違いない。なぜなら今日に至るまで制度の改正も廃止も唱えられていないからだ。

「第一部隊はマーキスさんが隊長で間違いないよね？」

「そうですね。それに頼りになる技師でもあるんです」

視線の先には大きな手で小さな工具を起用に使いこなすマーキスさんの姿があった。細かい仕事が似合わないにもほどがあって、な

んというか熊と格闘でもしているほうがまだ現実的な画に思える。なんとなく僕はほかの隊員の役割についても質問していた。

「シェリルさんは操縦士だからいいとして、ほかの三人もそれぞれ得意分野みたいなのがあったりするの？」

「うーん、通常任務での分担はわかりません。ただ作戦行動ならマーキスさんとマドカさんが特攻部隊、千秋さんが狙撃手、怜司さんとシェリルさんが後方支援ですね」

白銀髪の少女は誇らしげに語る。僕は遅すぎる感が拭えない疑問を口にした。

「僕に対して丁寧に振る舞う必要はないんじゃないかな？」

「ここは階級社会ですからね。肩書きがすべてで年齢や先輩後輩は関係ありません」

言われて僕は研究者候補生の立場を思い出した。現状は階級なしの候補生に過ぎないけど、半年の現場研修と一年の研究実務を乗り越えれば幹部候補として正式に調査部へ迎えられる。その際に与えられる階級は現場で例えるなら課長級に相当し、一部隊の隊長であるマーキスさんより偉い立場となるのだ。そのおかげで候補生は下士官から羨望ないし嫉妬の対象とされることが多い。

「そういうの気にしないでと頼んでも無理かな？」

「癖みたいなものですからね。急に直すのは難しいかもしれません」

他愛もない世間話が続く中、不意にジェシカが立ち上がった。自然と僕の視線もそちらへ向かう。少女漫画に主役として登場しそうな顔立ちの整った青年と、二次元から飛び出してきたかのような金髪ゴスロリ少女が大型二輪に乗って登場した。運転手の青年は豪快な急制動で停車して、回転翼機を整備中のマーキスさんに声をかけている。

「怜司さんとシェリルさんです」

紹介される前から予想はついていたけど、改めて最悪の事実を告げられると、皮肉の一つも言いたくなってしまうのはどうしてだろう。僕は肩を落としながら隊長を真似て盛大に溜め息を吐いた。

「存在する価値もない男って評されていた人が一番普通っぽく見えるのは僕だけかな？」
「そうですよね！　アタシも怜司さんは素敵だと思っていたんです！」
僕の両手を握って激しく同意するジェシカだった。今度は予想外というか、これはどう考えても恋する乙女の反応である。吊り橋効果じゃないことを祈ろう。ちなみに吊り橋効果とは極限状態や一時的な緊張による興奮が原因で恋愛に発展することを指し、基本的に長く続かないという研究結果が導き出されている理論のことである。
「ちょっと挨拶に行って来ますね」
返事を待つこともなくジェシカは回転翼機へ向けて駆け出していた。一人取り残された僕は、それにしてもコスプレ比率高いなと空を見上げることしかできなかった。
三十分後。
応急処置を済ませた回転翼機に七人が乗り込む。派手な装飾の施された大型単車は別部隊が引き取りに来てくれるらしい。操縦席に着いたのはゴスロリ服のシェリルさんで、軍用制服に身を包んだジェシカは副操縦席に腰を下ろしていた。
「主電源全回路接続、主電源全回路動力伝達を確認、稼働電圧臨界点突破、安全装置解除、安全装置解除を確認、絶対境界線突破後もシンクロ率は正常」
「すごく本格的ですね」
声出し確認を行うシェリルさんの至誠に僕は不覚にも感銘を受けてしまった。見た目で人を判断してはいけないのだけど、第一印象で受けた不信感はそう簡単に払拭できるものではない。しかし金髪ゴスロリ少女は一瞬でその汚名を返上したのだ。
「あれはシェリルの趣味だ。回転翼機の操縦にシンクロ率は必要ない」
呆れ顔のマーキスさんが端的に告げる。悔しいのかシェリルさんは激しく反論した。

「二次元と三次元のシンクロ率はめっちゃ重要です！　二次元作品の実写化で残念な気持ちになるんは演者のシンクロ率が足らへんからなんです！　そう思ったこと――一度や二度じゃないですよね？」

「一度もない」

マーキスさんはシェリルさんの真剣な眼差しを一蹴した。そこへ一番まともそうな格好をしている怜司さんが真顔で口を挟む。

「それってアダルトビデオに例えるとどういうことなんだ？」

「例えないとあかんの？」

「そのほうが理解しやすいからな」

七課には常識もセクハラ規定もないらしい。回転翼機内は完全な無法地帯だった。

「千秋姉様」

「なんで私に振るわけ？」

沈黙を貫いていた千秋さんは面倒臭そうに言葉を返した。使用した狙撃銃を整備しているところを見ると几帳面な性格をしているのかもしれない。黒チャイナドレス姿という点に目を瞑れば言動は概ね普通だからだ。

「千秋姉様の魅力溢れる例え話が聞きたいねん」

「だそうだ千秋姉様」

小動物のような瞳で懇願するシェリルさんと、それを受けた怜司さんが得意げな表情で千秋さんを見やる。チャイナ服の女性はやれやれという風に肩をすくめた。

「シンクロ率が低いっていうのは『制服モノなのに全体の三分の二くらい全裸で一体なにが目的かわからない』みたいな感じじゃない？　あるいはフェチモノなのに行為の途中で眼鏡を外すとか？」

「マーキス、シンクロ率は重要だ」と怜司さんが即答する。

「……そうだな」

真顔で迫られたマーキスさんは死んだような目をしながら首を縦に振る。諦めの境地というやつかもしれない。それでもなんとか語を継ぎ足せたのは経験の賜物だろう。

「とりあえず、そのシンクロ率とやらを高めることに集中してくれ」
その言葉で千秋さんの例え話に聞き入っていたシェリルさんが我に返った。正面へ向き直り操縦を再開する。
「内部電源充電完了、外部電源異常なし、最終安全装置解除、零号機――発進！」
回転翼機が中空へ舞い上がる。発進までに副操縦士の十倍の時間を要していた。
「マドカ、黒竜の落下地点は推測できたか？」
緩んだ空気をマーキスさんの声が破る。回転翼機内は適度の緊張を取り戻した。
「……あっち」
隊長の問いに制服姿の少女が短く答える。その指先は北北西を示していた。
「距離は？」
「……二十五キロ圏内」
回転翼機の機首が北北西に進路を取る。怜司さんは腕を組んで背中を壁に預けた。何気ない行動も様になっていて、ジェシカが好意を抱く理由もわからなくはない。女子ってイケメンに対しては異常に寛容だからなあ。
「目標の状態は？」と怜司さん。
「瀕死の重傷。片眼を潰されて地対空ミサイルも喰らってる」
マーキスさんより先に千秋さんが回答した。怜司さんは頭の後ろに手を回して気楽そうに告げる。軽薄な態度とは裏腹に分析に長けているらしい。
「それなら死亡確認をして終わりかもな」
「そうなればベストだが生き延びている可能性も高い」
「まあ、どちらにしても楽な仕事に変わりはないさ」
数分の飛行で回転翼機は避難区域に到達した。眼下には閑静な街並みが広がっている。従来に比べて竜の捕捉が早く正確なため、避難警報を無視しなければ竜害は土地家屋に限定される場合が多い。

それにしても初めて体験する無人の街は異様だった。まるで世界から突如として人類が消えてしまったかのような有様である。

「根城にしていた場所へ戻るつもりだったんでしょうか？」

副操縦席から疑問の声が上がる。少し間を置いて大柄な黒人は持論を展開した。

「なんとも言えないな。こんな街中に仲間がいるとも思えないが、もし助けを求めるために戻ってきたとしたら最悪の展開だ」

「脅威になるとは思えないが近郊の街でGランクの小竜と遭遇している。研究用に飼育していた小竜が逃げ出したとも考えられるが、あの獰猛さを養殖育ちの家畜が持ち合わせているとは考え難いんだよな」

「どうしてそういう重大なことをすぐに報告しなかった？」

マーキスさんが怒気を強めて美形の青年を詰問した。怜司さんはやれやれという風に肩をすくめる。責任の一端があると感じたのかシェリルさんも隊長を一瞥した。

「本部への連絡は済ませてある。あとは連中の領分で俺たちの出る幕じゃない」

次の瞬間――重い空気を掻き消す声が響いた。

「北西に目標を発見！」

前方には倒壊した建物で瓦礫の山が築かれていた。コンクリート片や折れた電柱、薙ぎ払われた車の残骸が散乱している。まるで爆弾を投下されたかのような惨状だった。Eランクにもなると墜落しただけで深刻な被害を与える。瓦礫の一角には大量の血痕が残されていた。その傍らに生死不明の黒竜が横たわっている。

「着陸しますか？」

「もちろんだ」

副操縦士の問いに隊長が告げる。自然と機内の空気が張り詰められていく。回転翼機は通常着陸進入で黒竜の目視圏外に着陸。マーキスさんとマドカを先頭に隊形が組まれる。戦闘で役に立ちそうにない僕とジェシカを最後尾の怜司さんが護衛する格好になった。

「ちょっとでも妙な動きを見せたら、こいつで息の根を止めてやるから心配するな」

マーキスさんは担いだ地対空ミサイルを掲げて豪快な笑みを浮かべる。倒壊した建物の跡地を抜けて瓦礫の山に到着。その一角に微動だにしない黒竜の姿を捉えた。特攻部隊の二人が左右に展開。千秋さんは援護に回り対物ライフルの標準を獲物に合わせる。ややあって制服姿の少女が『安全』という合図を送ってくる。どうやら目標はすでに絶命していたらしい。

無人の街で僕は正面から黒竜を見据える。今やこの惑星の支配者と呼ぶべき種族が壮絶な最期を遂げていた。巨体のあちこちで白い肉を露出し、大量の血を周囲に撒き散らしている。翼の骨も折れているらしく、おかしな方向へ曲がっていた。致命傷が地対空ミサイルなのか墜落の衝撃なのか判然としないけど、ともあれ動けば脅威となる存在も亡骸となれば憐れだった。

「竜害の規模を確認してから本部へ戻ろう。新人にはできるだけ多くの現場を見てもらいたいからな」

「それなら回転翼機より歩いて移動したほうが効果的かもしれませんね」

隊長に副操縦士が助言する。マーキスさんは鷹揚に首肯して賛成の意を表した。しかしここで順調に事が運ばないのが七課第一部隊なのかもしれない。

「ちょっと待った。その本部から通信が入ってる」

後方支援の青年が耳から下げた通信機に注目させる。新たな指令を受けているのか怜司さんの表情は真剣そのものだった。しばらくすると険しい顔で言葉を吐き捨てる。

「新しい竜害警報が発令された」

「内容は？」と先を促すマーキスさん。

「Cランクの蒼黒竜が都市へ向けて南下しているそうだ」

「それなら私たちの出番はないだろうね」

千秋さんの言葉に反論する声は上がらない。Cランクとなれば大

隊を要する高難易度の任務だ。一個分隊にも満たない七課第一部隊に出番はないだろう。

「もちろん討伐しろとは言われないさ。しかし出番があるかどうかは隊長殿次第だ」

そう言って怜司さんは通信機を隊長へ放り投げた。マーキスさんは怪訝そうな表情でそれを受け取る。手早く装着すると、ほんの数秒で顔を顰めた。

「避難警報が発令された都市圏の交通がパニックで麻痺しているらしい。仮に人的被害を避けられたとしても、都市での竜害は経済に多大な影響を与える。そこで避難の完了している竜害被災地で対応するらしい」

「その説明だけじゃ、わけがわからない。怜司じゃあるまいし要点を整理して話を進めてほしいね。それともそのまま言えないような内容なのか？」

うんざりした様子で千秋さんは肩をすくめた。ほかの隊員たちも浮かない表情をしている。ドレッドヘアの黒人は隊員をそれぞれ一瞥してから厳かに告げた。

「一課の大隊が到着するまで俺たちで目標を足止めする」

「マーキス、いつから算数ができなくなったんだ？」

千秋さんと怜司さんの皮肉が綺麗に重なった。どちらからともなく顔を見合わせている。

「あと二十数分で蒼黒竜が上空を通過する。目視圏内なら俺が地対空ミサイルで迎撃。目視不可の高度ならシェリルに回転翼機で地上へ陽動してもらう。千秋も狙撃に備えて機内で待機。マドカと怜司は地上戦になってからのバックアップを頼む。涼とジェシカはこれから指示する場所に避難だ。ただし望遠鏡で実戦を研究することは忘れるな」

七課第一部隊特有の円陣が組まれる。本日、二度目の開戦前の儀式だ。

「最低の一日だが、とにかく無事に帰還するぞ」

「それなら問題ない。数日後にはもっと最低の出来事が起こるからだ」

「そろそろ最低の一日を更新し続けているのは怜司だけだと自覚しなよ」

相変わらず会話は噛み合わないが目的は一致している。それぞれが足早に持ち場へと向かった。新たな激戦を前に悲壮感は漂っていない。ホエールインパクト前の世界に絶望していた者、両親を竜に殺された孤児、竜との戦闘に生き甲斐を求める者、誰かを守りたい一心で竜に挑む者、そういう連中を放っておけない者、超常現象対策局竜討伐部にいる理由は人それぞれだろう。その中で最下層に位置する七課に課せられた任務は、竜討伐及びそれらに関わる一切の業務で殉職率は他を圧倒する数値を弾き出している。

つまり七課第一部隊の面々は――最前線で適者生存を果たしている猛者なのだ。

そこには正義や悪の境界を越えた人類の本質があるのかもしれない。

四話

この任務が無謀であることはマーキスも理解しているのだろう。口には出さないが普段よりも身体が萎縮している。もっともこれは大男の体調変化に微塵の興味もない俺の主観なので無視してくれて構わない。

「怜司」

隊長が真剣な面持ちで俺の名を呼んだ。面倒臭いので気だるげに応じておく。

「どうした？」

「嫌な記憶が蘇ってな。お前の戯言でも聞いて気分を紛らわせたい」

「パワハラを受けた場合、どこに申請するのが効果的なんだ？」

とりあえず俺は期待された戯言を返しておく。なんかもう俺の半分は優しさで出来ているんじゃないかと思えるほどの神対応である。しかしマーキスの零した重い言葉を拭い去れたわけじゃない。まだ戦術が確立されていなかった頃、当時の上官命令だったとはいえ、隊長は数多くの仲間を見殺しにした経験があるらしい。端的に表現すれば捨て駒だ。今回のケースもそれに似ていて、心に刻まれた後悔を呼び覚ましたのかもしれない。

「この任務をどう読む？」とマーキスが質問を投げかけてくる。

「地上に下ろすのが最低条件だろうな」

高速飛行中の竜は一度地上に下ろしてしまえば状況が大きく変化する。例えば再飛翔する前に休憩するかもしれないし、あるいはもっと大胆に進路を変更して目的地を変えるかもしれない。最悪の場合でも一課の大隊が到着するまで時間を稼げる算段だ。

最悪の場合というのは――言うまでもなく俺たちの全滅を指している。忌々しい話だが政府の高官は首都圏と七課第一部隊を天秤にかけたのだろう。そして俺たちの首が経済活動の重さに負けて吊り上げられたわけだ。いつの時代も上の連中は周囲の動向ばかりに気

を取られて下を見ようとしない。誰もが認める名君というのは本当に見るべきところを見ている変わり者を指すのかもしれないな。

「黄昏れるのは戦闘後にしろ。それとも気になる点でもあるのか？」

不意に声をかけられて俺は我に返った。眼前のマーキスが訝しげな顔をしている。

「悪い悪い。マーキスが竜に食われて糞になる姿を想像していただけだ」

「今日は笑えんな」

大男は深刻な表情を浮かべた。俺はあくまでも戯言を返しておく。

「それは明日なら笑えるってことか？」

「生きていれば笑ってやるさ」とマーキスの口から苦笑が漏れる。

「マーキスが糞になったら認識票くらいは探し出して墓に埋めてやるよ」

適当に応じながら俺は胸ポケットから煙草を取り出した。銀製のオイルライターで火を点けて紫煙を燻らせる。マーキスは険しい顔付きで疑問符を頭の上に浮かべた。

「爆弾を抱えて煙草を吸うのか？　引火したらどうするつもりだ？」

「俺が爆発してマーキスはちょっと汚れるだろうな。それに煙草の引火が原因で死ぬような運しか持ち合わせていないなら、どうせ煙草を吸わなかったところでCランク蒼黒竜の糞になるのが関の山だ。つまり生き残るときはなにをしても生き残るし、死ぬときはなにをしても死ぬんだから細かいことは気にするなってことさ」

俺は煙草を吹かしながら長広舌を展開する。もちろんマーキスは途中から耳を傾けていない。そんなことよりという感じで話を本題へ戻した。戯言を求めてきたのは誰だと小一時間問い詰めたくなったが、今回は紳士代表として大人の対応を見せておくことにしよう。

「準備は済んだのか？」

「滞りなく完了だ。上手く誘導できれば手榴弾祭りを開催できる」

「期待できる効果は？」

「目標を苛立たせることくらいだな」

「上出来だ」
そう言ってマーキスは鼻先で笑う。そもそもEランク討伐用の人員と装備でCランクと対峙するのが無謀でしかない。つまり第一部隊の装備では最初から打つ手などなかった。というのもCランクは人類が戦術を確立している最上ランクなのだ。AランクやBランクによる竜害は「すべてが崩壊するレベル」で、実例が少ないこともあって、今のところ対策の足がかりさえ立っていないのである。ふと重要課題が生まれたので俺は臨戦態勢の大男に話しかけた。
「そういや『すべてが崩壊するレベル』ってのは、千秋の『怜司にだけは抱かれたくない意志』さえ崩してくれるのか？」
何食わぬ顔でマーキスは俺の質問を華麗に無視した。忌々しい。そのタイミングで制服姿の少女が戻ってくる。肩から対物ライフルを提げているが基本的に手ぶらだった。隊長は明らかに俺と異なる対応でマドカに問いかける。
「準備は？」
「……上々」
会話は最低限しか行われない。そんな二人に対して俺は軽口を叩いておく。
「ここは葬式会場建設予定地なのか？　景気が悪いにもほどがあるだろ」
「そうならないように最善は尽くすさ」
ドレッドヘアの大男は厳かに立ち上がった。次いで足元に置かれた地対空ミサイルを担ぎ上げる。蒼穹を見上げて表情を戦士のそれに変えた。
「そろそろ時間だ。マドカは蒼黒竜の捕捉、怜司はシェリルとの連携を頼む」
「……了解」とマドカ。
「……了解」とマドカの口調を真似る俺。
それから俺は端末が付帯された革手袋を操作した。左手の小型画面に回転翼機内の映像が表示される。音声も耳から提げた通信機で

送受信できる仕組みだ。千秋とシェリルが雑談しているので少し様子を窺っておく。

「千秋姉様、やっと二人きりになれましたね」と独特の口調でシェリルが告げる。

「わかったからちょっと離れてくれない？」

千秋は寄り添ってくるシェリルを押し返しながら応じていた。確かに比較的広い機内で密接しなければならない理由は世界中のどこを探しても見当たらない。しかしゴスロリ服の少女は恋人の距離まで身体を寄せていた。

「千秋姉様のそういうツンデレなところが大好きやねん。いつデレるのか想像しただけで夜も熟睡できたりできへんかったりするんですよ？」

「そんなこと想像しなくていいから永眠しなさい」

「それってつまり……ずっと私と一緒に眠りたいってことですよね千秋姉様」

シェリルは嬉しそうに微笑むのだが、千秋は二人行動になったことを後悔している様子だった。好かれているのは知っていただろうし、極度の二次元好きということも把握していただろう。しかしこれほどまで露骨に好意を示されたことはなかったのかもしれない。

「新手の嫌がらせだったら怒るわよ？」

千秋は苛立ちを隠さない。シェリルは胸の前で両手を絡ませた。

「私は千秋姉様だけやねん。だから千秋姉様も私を唯一の妹にしてください」

ゴスロリ服の少女は瞳を閉じて唇を尖らせた。千秋は完全に引いている。ある意味で完全に新手の嫌がらせだった。しかし飛んで火にいる夏の虫状態な美女はシェリルを無下にあしらうことができないらしい。

「考えておくから……無茶な真似はしないでね」

「はい！　千秋姉様に相応しい妹になれるよう頑張りますね」

そろそろ限界だろう。俺は操縦席の通信機に呼びかけた。

「シェリル、そろそろ起動準備を頼む。それから千秋に愛していると伝えてほしい」
次の瞬間、回転翼機内の二人が同時にこちらを向いた。
「了解しました。千秋姉様、愛しています」
「いや、その言い方だと俺からの愛が伝わらないだろ」
もちろん俺の突っ込みを誰も拾わない。来年くらいに俺を無視したら罪に問われる法案が可決されることを祈ろう。操縦席へ移動したシェリルは早々に起動確認を開始した。
「主電源全回路接続、主電源全回路動力伝達を確認、稼働電圧臨界点突破。安全装置解除、安全装置解除を確認、絶対境界線突破後もシンクロ率は正常」
「おーい、人の話は最後まで聞いたほうがいいらしいぞ？」
「愛ならきちんと伝えたっちゅーねん」
二人きりの時間を潰されて苛立っているのかシェリルの態度が悪い。ここは遺恨が残らないように下手に出ておくべきだろう。
「シェリル氏シェリル氏、あれだと俺の愛が行方不明になったままなんだな」
「今すぐ自爆ボタン連打して死んでくれへん？」
「いや、残念ながら俺は自爆ボタンとか搭載してない。仮に搭載されていたとしても連打するのは無理だろうな」
千秋は無言を貫きながら安全ベルトで身体を固定していた。Cランクの竜と対峙するのは初体験なので緊張しているのかもしれない。訓練通りに行動するだけと言い聞かせても、深層心理に潜む一抹の不安は簡単に拭い去れるものではないからだ。
「千秋、愛している」
「自爆できないなら自殺したらどうだ？」
「……次の備品申請書に『俺を愛してくれる女の子×一』って書いてもいいか？」
「内部電源充電完了、外部電源異常なし、最終安全装置解除、零号機――発進！」

完全に無視された。俺は涙を拭う演技をしながら状況を見守る。

回転翼機は騒音を撒き散らしながら上空へ舞い上がった。開け放たれた扉から千秋が強襲用狙撃銃を構える。シェリルは回転翼機を操縦しながら高周波方向探知機を確認。表示された目標の位置情報を地上へ伝えてくる。

「こちら陽動班。地対空ミサイル目視圏外に目標を捕捉。高速道路上空を経由して地上へ陽動でええかな？」

「地上班了解。目測を誤って叩き落されるなよ」

俺の軽口を聞き終えるが早いか回転翼機は蒼黒竜へ接近。肉眼で視認可能な範囲を遠巻きに並行追走する。通信画面には全長三十メートルを超える巨体が翼を広げて悠然と移動する姿が映し出されていた。鰐のような頭部には二本の角を生やし、全身を覆い尽くした蒼黒色の鱗は鋼の強度を誇る。牙や爪といった露骨な凶器も怖いが、このクラスになると長い尻尾も一振りで建物を薙ぎ払う凶悪な武器だ。蒼黒竜は周囲を警戒することもなく飛翔している。史上最強の生物は本能的な怖れを知らないのだろう。

シェリルは回転翼機を目標の視界に移動させる。蒼黒竜の縦に伸びた虹彩が少しだけ動いた。画面越しでも異様な迫力を醸し出している。畏怖で身体が萎縮したら致命的だが、七課第一部隊の正操縦士は恐怖心と三半規管が出張中なので問題ない。

「興味を示したらそのまま降下。無視するようなら千秋姉様の出番です」

正操縦士は回転翼機を左右に揺らして目標を苛立たせる。しかし蒼黒竜は騒音を撒き散らす物体を不愉快そうに睥睨しているだけで攻撃に移る気配はない。第一案では埒が明かないと判断したらしく、本来なら穏便に済ませたい陽動で千秋が動く。七課第一部隊の射手は強襲用狙撃銃の狙いを定めて目標の左前肢へ発砲した。

音速の弾丸が左前肢を捉えた瞬間――鋼鉄の如き鱗が五十口径の鉛玉を弾き返した。Cランクの怪物ともなれば、ミサイル級の武器でなければ負傷させることもできない。それでも不快感を覚えさせ

るには充分な効果があったようだ。蒼黒竜は鰐のような顔を回転翼機へ向けて大気を吸い込む。

「来るぞ！」「来るわよ！」

地上にいる俺の声と回転翼機内にいる千秋の声が通信機を通して綺麗に重なる。

刹那――蒼黒竜の口から放たれた超高熱の吐息は空気中の酸素を燃焼させて火炎となった。シェリルは回転翼機を水平移動させて範囲外へ緊急脱出。前方向へ多少の拡散はあるが、息を吸い込むという溜めも大きいので回避できる。もちろん目標の真正面に位置取れば話は別で、左右どちらかの前肢方向が安全という戦術が確立するまでは悲惨だった。

第二案で無事に攻撃対象となった回転翼機は目標の陽動を開始する。千秋は蒼黒竜の機嫌を損なわせるために間隔を置いて散発射撃。理想を言えば油断させたまま任務を遂行したいのだが、興味を失くされるという最悪の事態を避けるためには仕方がない。

「グォオオオオッ！」

抱合とともに鰐のような頭部が回転翼機に迫る。シェリルは卓越した操縦技術で機体を水平移動させて牙を回避。際どい状況を迎える度に謎の独り言を発しながら乗り越えていく。なんというか生死のかかった戦闘をゲーム感覚で凌いでいるのだ。七課以外なら真面目に取り組めと文句を言われているだろうが、普通に操縦すると精度が落ちるという変態なのでどうしようもない。

「もう一回来る！」と千秋が叫んだ。

回転翼機は大きく軌道を変えて緊急回避。放たれた灼熱の吐息は機体の真横を通過していく。直撃すれば爆発炎上は免れない。シェリルが天性の勘で操縦しているのに対して、千秋は培った経験と訓練で狙撃に当たっていた。身体を寝かせて激しく揺れる機内でも安定した姿勢を保っている。照準器に映し出された蒼黒竜へ怜悧な視線を向けて発砲。大口径の弾丸が目標の苛立ちを持続させる。

「このまま最終地点へ突入。万が一に備えて着地は見送り再浮上で

ええかな？」

数分の戦闘で蒼黒竜の脅威を感じ取ったのだろう。普段は救いようのない糞女だが、操縦桿を握らせれば頼りになる戦力だ。これほどの操縦技術と判断能力を兼ね揃えた操縦士は一課でも数少ないだろう。俺は感嘆しながら通信機に向けて告げた。

「地上班了解。あとは俺たちに任せておけ」

「陽動班了解。幸運を祈っとくわ」

そう言って片目を閉じるシェリル。俺は通信機の映像を落として持ち場へ向かった。陽動は概ね成功している。あとは地上で待ち構える俺たちの足止めが通じるかどうかだ。

「首尾は上々だ」

「そのようだな」

マーキスは視界の端に捉えた蒼黒竜を見上げている。巨大な体躯は回転翼機胴体の倍ほどもある化物だ。地対空ミサイルの射程である目視圏内に入っているのだが、迂闊な砲撃は陽動班を危険に巻き込む可能性も高い。まずは確実に地上へ落とすことが肝要だ。そしてそのための準備に取りかからなければならない。不意に黒人の大男が俺とマドカに部下へ檄を飛ばした。

「降りて来るぞ！　二人とも目標の急降下に警戒を怠るな！」

すでに所定の位置に移動した俺とマドカは無言で首肯する。このランクになると着地するだけで甚大な被害を招くのだ。直撃して下敷きになるのは言うまでもなく、急降下時に発生する突風に巻き込まれただけで命を落とす危険性がある。慎重に慎重を重ねても万全ということはない。

高度を下げた回転翼機が予定の通過地点を抜けていく。その左右にスタングレネード弾を装填したグレネードランチャーを構えて待ち伏せる俺とマドカ。追跡者たる蒼黒竜が陽動地点を通過する機会を逃さずに発射。着弾と同時に八百万カンデラの閃光と百八十デシベルの爆音が発生。目標の視覚と聴覚及び平衡感覚を一時的に麻痺させた。

「グォオオオオッ！」

重低音の唸り声を上げて蒼黒竜は地面へ急降下。激しく叩きつけるような羽ばたきは突風を巻き起こし、無造作に振られた長い尾がコンクリート壁を粉砕する。轟音を立てながら着地した目標は再度咆哮を上げた。眼前に放置されていた車を右前肢を振り下ろして叩き潰す。苛立っているのは火を見るより明らかだった。

マーキスは地対空ミサイルを蒼黒竜にロックオン。しかし発射すべきか否か判断し兼ねている様子だった。七課第一部隊に与えられた任務は時間稼ぎである。不機嫌なまま街を徘徊してくれるならそれに越したことはない。わざわざ宣戦布告をしてCランクの怪物と戦争をする必要はないのだ。

蒼黒竜は周囲を睥睨しながら障害物を前肢で薙ぎ払う。建物が崩れて白煙と粉塵を舞い上がらせた。どうやら回転翼機より特殊閃光弾を放った俺とマドカに意識が向いているらしい。それならば鬼ごっこも悪くはないだろう。マーキスもそう判断したのか攻撃を止めて合流地点へ移動を開始。俺とマドカも目標の動向を観察しながら逃亡を優先する。

竜の巨大な体躯は方向転換に向いていないが、長く強靭な首が全方向の監視を可能にしていた。三百六十度見渡せるので単純に考えて死角はない。中途半端に姿を晒せば命はないだろう。まずは早く距離を取りたいという気持ちを落ち着かせなければならない。

本当に――やれやれだ。

五話

白煙が晴れると建物が瓦礫の山と化していた。その上を蒼黒竜が乗り越えていく。明らかに機嫌が悪く乱暴に振った尻尾でビルの側面を破壊。咆哮後に息を吸い込む動作。広範囲に拡散された灼熱の吐息は紅蓮の炎を纏い街路を焼き払う。ガソリンに引火した車は爆発して炎上。木造はおろか鉄筋コンクリートさえ溶解させる超高熱だ。最新の防火服でもその意味を成さない。発見事例が少なく戦術の確立されていないAランクやBランクに注目を奪われているが、実際に対峙すればCランクの圧倒的な脅威に言葉を失うことになるだろう。

「グォオオオオッ！」

蒼黒竜の尻尾が新たなビルを倒壊させる。白煙に乗じて移動する少女を縦長の虹彩は見逃さなかった。まずは鰐のような頭部を低い位置まで下げる。次いで大顎が開かれて灼熱の吐息が紡ぎ出された。火炎を伴う熱波がアスファルトを泡立てながら前方位を蹂躙していく。身を潜めていたマーキスは一変した街路へ躍り出て地対空ミサイルを発砲。放たれた筒は射手の安全を確保するとロケットブースターに点火して超音速を超える。

次の瞬間――超高速のミサイルが蒼黒竜の胴体に命中。爆発して鋼の鱗を削ると血飛沫を撒き散らさせた。鰐のような頭部が地面を這うようにして射手へ向けられる。マーキスは本能的に発射機を投げ捨てて全力疾走。直後に獲物を追う猛獣の如き灼熱の吐息が放たれる。隊長はコンクリート壁に隠れて直撃を避けるが、蒼黒竜に捕捉されるという絶望的な状況は何一つ変わっていなかった。

「糞っ垂れだぜ」

悄然と死を迎えるつもりはないだろうが、それでもこの危機を乗り越える算段が付いているとも思えない。地対空ミサイルを無くした今、武器らしい武器は自動拳銃と手榴弾くらいだろう。とてもじ

ゃないがCランクの怪物相手に役立つ代物ではない。
刹那――独特な騒音を奏でながら回転翼機が上空に登場。開け放たれた扉から蒼黒竜の頭部へ集中攻撃。標的は悠然と頭を持ち上げると大気を吸い込む。急激に軌道を変えて回転翼機は灼熱の吐息を回避。そのまま中空を旋回して意識を引き留める。状況を確認したマーキスはマドカが襲撃された地点へ駆け出した。
「完璧な援護だ。蒸発してなければマーキスがマドカを助けるだろう」
俺は耳から提げた通信機に告げた。機内のシェリルが指示を仰いでくる。
「これからどうしたらいいのん？」
「蒼黒竜を再飛翔させたいために視界から外れてくれ。援護としてスタングレネード弾を撃ち込むから視線は上へ向けといてくれよ」
「了解」
許可を得た俺は回転翼機に気を取られている蒼黒竜へ二発目のスタングレネードを発砲した。八百万カンデラの閃光と百八十デシベルの爆音が発生。一時的に目標の視覚と聴覚を混乱に陥らせる。暴走される危険性も孕んでいるのだが、この戦力差で安全第一というわけにもいかない。俺は移動しながら回転翼機の撤退を確認。次いで起爆装置を操作して仕掛けた手榴弾を連鎖爆裂させる。位置的な問題で蒼黒竜に直撃するわけではないが、爆音と硝煙で注意を引き付けることができれば大成功だ。
時間稼ぎという任務も戦闘が始まれば臨機応変に当たるしかない。俺は蒼黒竜の様子を確認しながら移動を再開した。幸いにも注意が爆発地点へ向けられているので、この機を活かして距離を稼いでおくべきだろう。
「グォオオオオッ！」
無人の街に蒼黒竜の雄叫びが響いた。上手く翻弄しているようにも見えるが、それは現時点においてという条件化でしか成り立たない。なぜなら目標は未だ無傷に等しいし、こちらは一撃で殲滅され

る危険性があるからだ。つまり俺たちは敗戦確定の局面で時間繋ぎの一手を打っているに過ぎない。相手の油断に乗じて逆転できる状況ではなく、あくまで往生際悪く投了を拒み打ち続けているだけなのだ。

俺は瓦礫を越えてマーキスの向かった地点へ急行する。本来なら一堂に介する行為は極めて愚かだが、もし早々に戦力を欠いたのなら、それを把握しておくことも今後の対策として役に立つだろう。焼かれて変形した地面の先には溶解したコンクリート壁があった。完全に貫通していないことを考慮すれば、熱波で負傷していることはあっても逃げ延びた可能性が高い。

「悪運だけは強いな」

長居は無用なので俺は合流地点を目指すことにした。走りながら思考する。目標が地上に釘付けであれば問題ないが、興味を失くして上空へ飛び立ちそうなら、なにはともあれ追加攻撃を仕掛けなくてはならない。しかし七課第一部隊の装備でCランク蒼黒竜の進行を止めることは困難だ。これまでのような待ち伏せや不意討ちを繰り返すにしても、それを逆手に取られて一網打尽にされる可能性も否定できない。高位の竜族は学習能力が高く、爬虫類の親戚と侮れば地獄行きが確定する。

万事休す――は日常茶飯事なので気にしない。

俺は左手の端末を確認して暗澹とした気分になる。一課が到着に必要な時間の半分も経過していない。極度の緊張が体感時間を麻痺させているのだろう。不意に蒼黒竜は上体を起こして翼を羽ばたかせた。これは飛翔するためのものではなく、旋風を巻き起こすという竜独特の攻撃手段である。羽ばたきから生み出された秒速六十メートルの強風は、車を転がし瓦礫と化したコンクリート片を広範囲に飛散させた。

一つ一つの行動が災害そのものである。俺は頑丈な建物を背にしながら思考を続けた。迂闊に動いて強風に煽られるのは最悪だが、じっと身を潜めていたら建物が倒壊しましたというのも笑えない。

しかしまあ、どちらにしても死と直結しているという事実が最も笑えないのは確かだろう。

強風に煽られ続けた建物が嫌な音を立て始める。陽動班の援護を期待したいところだが、向こうも命懸けの作戦を何度も行えるわけではない。しかもこの強風下では接近できる方向がかなり限定されている。やはりここは自力で乗り越えるしかないだろう。

そう決断した直後――別の建物からマーキスが姿を現した。すぐさま手招きして俺を呼び寄せる。蒼黒竜からは死角になっているので遠慮なく全速力移動。合流を果たした直後に不躾な質問を投げかけられた。

「手持ちの火力は？」

「それよりマドカはどうした？」

マーキスの問いに俺は疑問文を重ねた。生死不明の状態で消息を絶った場合、結果が悪ければ悪いほど安否情報を避けたがるからだ。しかし眼前の大男は似合いもしない笑みを浮かべる。

「マドカなら先に行かせた。利き腕を焼かれて得物が扱えない様子だったからな」

「歩けるなら命に別状はないだろう。それで役に立ちそうな作戦はあるのか？」

「あったらこんなところで怜司と話しているわけがないだろう？」

「また一か八かの博打かよ？」

「百パーセント負ける博打よりは素敵だろ？」

マーキスはお手上げの仕種を見せながら苦笑を浮かべる。気持ちを落ち着かせるための軽口。俺は肩をすくめながら戯言を追加しておく。

「こういう局面では隣に千秋がいてだな、生きて帰れたら愛し合おうと約束するのが王道なんだよ。空気の読めない上官の所為で誰も得しない展開になっているんだぞ」

「そういう展開の死亡率は百パーセントだとシェリルが言っていたぞ。確か死亡フラグがどうのこうのと話していたな」

「糞真面目野郎が洒落を言い出すほうが心配だけどな」
ともかく俺は装備している武器弾薬を確認した。まずは腰から提げた散弾銃と身体に巻き付けたショットシェル。小口径の自動式拳銃は自害用にしか使えないので対象外。あとは弾を切らしたグレネードランチャーくらいしかない。通信役としては充分な装備だが、対Cランクなら丸裸も同然の脆弱な格好だった。
「あれを使おう」
マーキスが指し示したのは建物の脇に停めてある自動二輪だった。排気量六〇〇?の大型スクーターである。適正はともかく移動手段が増えれば作戦の幅も広がるだろう。ちなみに非常事態なので違法に開錠してエンジンを起動させても合法化される。
「立ち向かうつもりなら俺の武器は散弾銃くらいだぞ?」
「そうでもないさ」
隊長は手にしたスタングレネード弾をこちらへ差し出した。どうやらマドカから残弾を受け取ったらしい。時間稼ぎに最も適した装備なので有効活用すべきだろう。俺は残弾一発を受け取りグレネードランチャーに装填した。
「手順は?」
「まずは運転と狙撃で役割分担。出会い頭に一発お見舞いしてそのまま突っ切る」
「随分と斬新な自殺の仕方だな」と軽口を返しておく。
「徒歩では不可能だが単車を使えば可能だ」
マーキスは頑なに譲歩しない。こちらも作戦内容の変更を期待しているわけではないので話を進める。重要なのは成功率を上げることで口論に勝つことではない。
「強風でスタングレネード弾が流れたら一巻の終わりだぞ?」
高速移動中の単車を踏み潰すことは困難でも、身体を捻り強靭な尻尾で広範囲を薙ぎ払われたら対抗手段がない。マーキスは七課第一部隊の長として告げる。
「そのときは俺と心中だな」

「最悪の死に方を真顔で語るな。なんとか生き延びる方法を考えたらどうだ？」
「もちろん黙って殺されるつもりはないさ」
大男が不敵な笑みを浮かべながら右手を掲げる。俺は拳を合わせて盛大に溜め息を漏らしておく。命懸けの任務に挑戦するなんて映画の主人公だけにしてほしいね。

◇◇◇

避難場所まで移動を済ませた僕は両手を膝に置いて息を整える。酸素を欲する肺と間違いなく筋肉痛になるであろう身体が悲鳴を上げていた。たった二キロ走っただけでこの有様である。それに比べて白銀髪の少女は澄ました顔をしていた。額に汗を浮かべているけど疲労感は微塵も感じさせない。
「操縦士も体力強化訓練を受けてるの？」
「当然です」
当然らしかった。僕は己の脆弱さを恨みながら心肺機能の回復を待つことにする。
「そろそろ動きがあるかもしれません」
そう言ってジェシカは望遠鏡を覗き込む。僕は専用の制服に身を包んだ副操縦士を見上げた。異国人だけど同年代の女子である。この世界をなんとかしたいという気持ちは誰にも負けないつもりだったけど、それは酷く狭い範囲を基準に判断していたものかもしれなかった。世界には強い信念を持って行動している人が溢れている。高級な職に就きたいと勉学に勤しんでいる学生に比べて、生死を争う現場で凌ぎを削り合っている人間なら尚更なのかもしれない。
「ジェシカ、ちょっと質問してもいいかな？」
落ち着きを取り戻した僕は白銀髪の少女に問いかけた。望遠鏡から視線を外したジェシカは「どうぞ」と不思議そうに首を傾げる。
「僕はこの世界がどうしてこうなったのかを知りたい。そのために

超常現象対策局調査部の研究者候補生になったんだ。ジェシカはどうして今ここにいるの？」

ふとジェシカの表情に暗い影が差した。僕は語が継ぎ足されるのを静かに待つ。やがて白銀髪の少女は重々しい口調で語り始めた。

「アタシは孤児でしたからね。十五歳になれば自動的にどこかの部署へ配属されることが決定していたんです。だから特に思い入れはありません」

異国の少女は儚げな表情を浮かべる。僕は後頭部に延髄蹴りを喰らったような衝撃を受けた。それは世界政府が打ち出した法案の一つで、素行不良者の矯正施設や孤児院との提携による隊員登用手段である。表向きは様々な人権侵害を指摘されていたのだけど、裏では現状に最も適した内容と評価されていたらしい。つまり社会に悪影響を及ぼす者や弱者から死んでもらえという図式だ。

どんな言葉をかけるべきなのかわからなかった。目の前にいる少女は十五歳にして最前線に放り込まれたのである。本人の意思とは無関係に死の淵に立たされたのだ。

「あ、でも勘違いしないでくださいよ。嫌々任務に取り組んでいるわけじゃないですし、今はもう仲間を失いたくないって気持ちで動いていますからね」

ジェシカは取り繕うように手を顔の前で左右に振った。その表情はどこまでも無邪気で、だからこそ余計に放っておけなくなる。

「気を悪くしたなら謝るよ」

「気にしていません。それよりも前方を確認したほうが良さそうです」

促されて僕は立ち上がった。事前に手渡されていた望遠鏡で東方向を眺める。白い雲の中に黒い点のようなものが見えた。それが次第に大きくなって竜影だと把握する。しかもCランクという人類が戦術を確立できている最上級の強敵だ。

「第一部隊でCランクとの戦闘経験がある人っているの？」

「隊長昇格条件にCランク以上との戦闘経験が含まれているので、

マーキスさんは確実ですが、ほかの方は七課配属までの経緯がわからないので微妙なところですね」

白銀髪の少女は端的に分析した。僕は一抹の不安を口にする。

「大丈夫かな？」

「わかりません。ただアタシたちが現場に残っても邪魔になるだけです」

きっぱりとジェシカはなんの躊躇いもなく宣告する。そう――僕はまだ任務の過酷さを理解していなかった。言外に役立たずと評されたことに反論したくなる。しかし発言者の少女が歯を食い縛っている姿を見て考えを改めた。

「悔しいの？」

「仲間の危機に指を加えて祈ることしかできないわけですからね」

気休めにしかならないけど言っておくべきだろう。

「僕が同行していなければ状況は変わっていたかもしれない。ジェシカは僕の護衛兼案内役みたいなものだろ？　研究者が戦場へ赴くときは護衛と案内を雇って三人一組で行動するのが基本だと本で読んだことがある」

「優しいんですね」

くすりと白銀髪の少女が微笑む。それを機に僕は視線を空へ戻した。

局面は回転翼機の陽動から始まり地上戦へと発展する。蒼黒竜の反撃が織り交ざり周辺の建物が破壊されて白煙を立てた。マーキスさんに指定された避難場所からでも、その圧倒的な脅威は余すことなく伝わってくる。どれくらい経ったのだろう。満身創痍のマドカが千秋さんに肩を借りる状況で姿を現した。

「大丈夫ですか？」

僕とジェシカの声が綺麗に重なった。その様子を見て千秋さんが苦笑する。

「命に別状はないよ。最初は回転翼機へ運ぼうとしたんだけどね、事の成り行きを見たいっていうからこっちへ連れて来たんだ」

「ほかの三人は？」とこれまた質問が破る。
「シェリルは回転翼機内で待機。ほかの二人も適当に生きてるんじゃない？」
応じながら千秋さんはマドカを地面に座らせた。裏山というわけではないのだけど、ほかより標高があるので観察には向いている。美女は狙撃銃の照準を望遠鏡代わりに覗き込む。ジェシカが負傷した少女の手当てを始めたので、僕の話相手は必然的に狙撃銃の照準を覗き込んでいる美女となった。
「戦況はどうなんですか？」
「現時点でまだ大暴れしているわけだから、蒼黒竜を足止めするという任務は成功だろうね。あとは一課の領分で七課には関係がない」
「途中から部外者にされるみたいで、なんか割り切れない気持ちになりますね」
「すぐに慣れるさ」
「そういうものなんですか？」と不貞腐れた声を出してしまう。
刹那――千秋さんが僕の腕を手繰り寄せた。望遠鏡を覗きこんだまま前方を確認しろという合図を送ってくる。僕は美女に寄り添うような格好で手持ちの望遠鏡を覗き込んだ。複数の戦闘機が隊列を組みながら北上してくる。
「あれは――」
「主役の登場だ」
千秋さんが僕の語を引き継いだ。それから看護中のジェシカに言葉を投げかける。
「新入りの副操縦士も見ておいたほうがいい」
「……えーっと？」
白銀髪の少女は千秋さんとマドカを交互に見やる。すると手負いの制服少女が事も無げに告げた。
「……私のことは構わなくていい」
「了解しました」と律儀に答えるジェシカ。
超常現象対策局竜討伐部一課――いよいよ世界最高峰の戦力が動

き始めるのだ。

六話

一課による本格的な討伐が開始された。まずは四機で編成された戦闘機が空対地ミサイルを連続発射。着弾して悲鳴を上げる蒼黒竜に別の四機が連携してガトリング砲を浴びせていく。負傷しながらも蒼黒竜は呼気を放出して反撃。しかし高速飛行する戦闘機を捉えることはできない。すべてを焼き払う灼熱の吐息も当たらなければ意味がなかった。

目標が思いのほか頑丈と把握した一課は、上空から二百ミリを超える榴弾を大量に投下する。途絶えることのない爆裂音が蒼黒竜の咆哮を掻き消し、もくもくと立ち昇る爆煙が目標の姿を完全に覆い尽くした。

闇雲に放たれた反撃を食らわないよう戦闘機は煙が晴れるまで蒼黒竜の上空から退避。数十秒後、白煙から姿を現した目標はまだ動いていた。しかし角膜と水晶体を破壊されて失明しているのか挙動不審な態度を見せている。

「勝負あったな。あとは寄せ切るだけだ」

そう呟いて千秋さんは腰辺りを弄る。しばらくしてチャイナドレス姿であることに気付いたらしく、美女は舌打ちをしながら地面に転がっている石を蹴り飛ばした。

「どうかしたんですか？」

「煙草を忘れた」

黒髪の美女は不貞腐れた顔で応じた。なにやら戦闘で昂ぶった精神を落ち着けるとかで、生死を彷徨うような重症でもない限り戦闘後の一服が習慣になっているらしい。ジェシカがマドカの看病へ戻る。僕も八つ当たりされないよう望遠鏡に視線を戻した。

一課の包囲網は無用な被害を受けないよう慎重に慎重を期して蒼黒竜を追い詰めていく。状況から考えて本作戦の成功は確実だろう。問題は最後まで足止めに当たっていたマーキスさんと怜司さんの消

息である。巨大な竜の動きは捕捉できても、個々人の所在を把握することは困難だからだ。

「……結果は？」

思わぬ声に僕は発言者を見やった。負傷した少女が千秋さんに視線を送っている。右半身の制服が焼け落ちて肌を露出しているのだけど、痛ましい傷跡が扇情的な格好よりも目立つため邪な感情は湧いて来ない。傍らで少女を支えているジェシカの表情も暗いままだ。質問を受けた美女はあくまで冷静に戦局を報告する。

「もう詰んでる。ここからの逆襲や取り逃がしは考えられない」

「……そう」と少女は表情を変えずに呟いた。

「気休めにしかならないがマーキスと怜司も安全圏に脱出してるさ。蒼黒竜の討伐が終わったら一課の医療班を呼んでくるついでに合流地点を確認してきてやるよ」

「……そう」

無表情のままマドカは視線を伏せる。勝利が確定しても浮かれられる雰囲気ではない。重苦しい空気を払拭するために僕は敢えて沈黙を破ることにした。

「千秋さんに同行してもいいですか？」

「あ？」と煙たそうな表情と疑問符が返ってくる。

「生で現場を見てみたいのでお願いします」

「現場に興味はなかったんじゃないのか？」と鋭い指摘。

「気が変わったんです」

「勝手にしたらいいんじゃない」

やれやれという風に千秋さんは肩をすくめる。しかし場の雰囲気は変わることなく暗澹としていた。もしマーキスさんや怜司さんがいたら、この嫌な流れを変えることができたのだろうか？

それから数十分後、一課の総攻撃が終了する。それは暗黙の了解として目標の沈黙を意味していた。黒チャイナドレス姿の美女が静かに立ち上がる。勝手にしたらと言われただけなので置いていかれる可能性を否定できない。僕は千秋さんに付き従うように行動する。

しかし美女は予想外の言葉を口にした。
「私は仲間を置いていったりしない。だからそういう心配はするな」
千秋さんの表情は真剣そのものだった。その原因はおそらく過去に起因しているのだろう。しかしそこへ踏み込むには付き合いが浅過ぎる。だから僕は敢えて間抜けな質問を投げ返すことにした。
「様子を見に行くだけですよね？　道中で未確認生物とか出てくるんですか？」
「未確認生物のほうが可愛いかもね」
「はい？」と僕は頭の上に疑問符を浮かべる。
「竜害に便乗して悪行を働く窃盗団を知らないのか？　連中にとってEランクは最も仕事に適した竜害なんだよ。もっともCランクの来訪は予想外だろうけどね。それに飼育の許可されていない未確認生物や竜を秘密裏に囲ってる馬鹿もいて、竜害によって檻が壊れて逃亡なんてことが過去に何度も起こっている。こんな時代になっても人類は気持ちを一つにできない。訓練に対竜だけでなく対人があるのはその所為さ」
語り終えた美女は口を引き結ぶ。なにか思うところがあるのだろう。やがて千秋さんは当初の目的を思い出したかのように歩き始めた。僕はその後ろ姿を静かに追う。戦闘が行われていた周辺まで来ると、一課の隊員が黒竜と蒼黒竜の遺体回収作業を開始していた。
「お疲れさん。あとは俺たちの仕事だ」
金髪碧眼という少女漫画に出て来そうな青年が千秋さんに声をかけてくる。馬鹿にした様子はなく、心から労っている感じだった。対する美女は無愛想に煙草を吹かす仕種を見せて問いかける。
「持ってないか？」
「俺は煙草を吸わないからな。これを機に禁煙したらどうだ？」
「余計なお世話だ。それより医療班を要請したい」
美女の言葉に美貌の青年は眉根を寄せた。
「こちらで回収した二人以外にも負傷者がいるのか？」
「マドカが蒼黒竜の熱波にやられた。ところで回収した二人の様子

はどうなんだ？」

青年の表情から明るさが消えた。重苦しい空気に拍車をかけるような鈍い声で告げる。

「……残念な結果になった」

数瞬の沈黙。やがて千秋さんは端的に応じた。

「よくあることだ。場所は？」

「このまま直進すれば一課の野営が見えるはずだからすぐわかるよ」

聞き終えるが早いか千秋さんは無言のまま歩き出した。僕は喉まで出かかった気休めの言葉を飲み込む。仲間を亡くした美女の心に安易な励ましは届かないだろう。

黒竜と蒼黒竜の暴虐によって街は荒廃していた。いくつもの建物が倒壊し瓦礫の山と化している。熱波で溶かされた地面やコンクリート壁、強風で吹き飛ばされた車が無造作に転がっていた。そのどれもが人為的に起こされたものではなく、まさしく天災であるかのような絶望的な破壊だった。映像で見た竜害とはまったくの別物である。それは規模がどうこうではなく、眼前に広がる光景が紛れもない現実だからだ。

しばらく歩いて行くと言われた通り野営陣が視界に映った。鉄パイプと白い布で構成された簡易の休息場である。千秋さんは業務中であろう面々の脇を抜けて進んでいく。そこまで器用に動けない僕は道を空けてもらえるよう頼みながらの追従となった。

野営陣の中には簡素な寝台が多数設置されていて、手当てを受けた怪我人が苦しげな表情を浮かべて横たわっている。先を急ぐ千秋さんを追いながらも、視線は悲壮感の漂う負傷者へ向かってしまう。そもそも無人であるはずの街に一体どうしてこれだけの被災者が存在するのかわからない。そんな中、一際目立つ人物を発見した。

寝台の傍らに立つドレッドヘアの大男――マーキス・ウォーレン隊長である。背広を脱いだ上半身には仰々しい包帯が巻かれていた。本来なら安静にしておくべき傷なのだろうけど、歴戦の猛者には己の傷より気になる存在があるらしい。

先着した千秋さんは寝台に視線を落として黙り込む。重々しい雰囲気がすべてを物語っていた。追い着いた僕は恐る恐る状況を確認する。そこには顔に白い布を被せられた怜司さんと思しき人物が安らかに眠っていた。

「役には立ったのか？」と美女が問いかける。

「まあな」とマーキスさんが端的に答えた。

「今日に限って手向ける煙草もない」

「別れの言葉くらいかけてやったらどうだ？」

「馬鹿野郎――かな」

「それだけか？」

「ほかにかけるべき言葉が見つからない」

野営陣に沈痛な沈黙が訪れる。しかしそう感じていたのは僕だけらしかった。

次の瞬間、寝台から聞き覚えのある声が零れた。

「素直になれよ。とりあえず『馬鹿。私を置いて死ぬなんて酷いじゃない』と涙ながらに俺の胸へ崩れ落ちて来てもいいんだぞ？」

僕が呆気に取られていると、怜司さんは自ら顔の布を取り払って上体を起こした。マーキスさんはやれやれという風に肩をすくめる。おそらくこの茶番に無理矢理付き合わされていたのだろう。矛先を向けられた千秋さんは質問を無視して疑問符を投げ返した。

「煙草、持ってるよな？」

「それがどうかしたのか？」

怜司さんは煙草を差し出しながら眉根を寄せた。千秋さんは許可も取らずに箱ごと引っ手繰る。悪魔の所業を終えた美女は取り出した煙草を口に咥えて歩き出した。

「外で一服してくる」

立ち去る千秋さんを怜司さんもマーキスさんも止めようとしない。僕は一連の流れを呆然と見守ることしかできなかった。少し間を置いて隊長が口火を切る。

「本当に大丈夫なのか？」

「ああ――この場を凌げば名誉の負傷で一週間は休めるだろ？　千秋には『過酷な任務による負傷を装った嘘の休暇』と思われていたほうがいい」

そう言って怜司さんは上体を寝台へ戻した。わけがわらない。ただ二人が共謀して千秋さんを騙そうとしたのではなく、協力して千秋さんから真実を隠そうとしたことだけはわかる。頭で考えるよりも先に僕の口は疑問文を紡ぎ出していた。

「どういうことですか？」

「どうもこうもない。愛する女に心配をかけたくないという当然の心理だ」

美貌の青年は神妙な面持ちで告げる。隊長が怜司さんの発言に補足説明を加えた。

「存在する価値もない男というのは七課第一部隊を機能させるための演出だ。本当の怜司は第一部隊に欠かせない存在なのさ」

僕は絶句するしかなかった。しかしよくよく考えてみれば不思議なことではない。服装は間違いなく一番まともだし、なにより機器系統担当なら頭も切れるのだろう。曲者揃いの七課第一部隊を上手く機能させるために、自分自身が最も曲者になる必要があったのかもしれない。

「ふむ。一勝一敗ってところだな」

「マーキスが余計な助言をしなければ俺の二勝だろーが？」

腕を組むマーキスさんに怜司さんが食ってかかる。二人の会話にまるでついていけない。

「……えーっと？」

目を白黒される僕に怜司さんが解説してくれた。

「要するに俺は『俺が死んでも千秋は無関心』と『新入りでも俺の存在価値を信じる奴はいない』に賭けていたわけだ。疑問は解けたか候補生？」

「……」と無為な時間を費やしてしまう。

――信じられない。本当に七課第一部隊の連中は最低だ。

「どうしてマーキスさんまで加担しているんですか？」
「新入りの考え方や千秋の本音を知る数少ない機会だったからな」
ぐうの音も出ない。ただの悪ふざけで終わらないのが厄介だ。ともあれこの件について追求しても無意味だろう。僕は素直に話題を変えることにした。
「ところで怪我人がこんなにいるのはどういうことなんですか？」
周囲を見回しながら小声で尋ねる僕にマーキスさんが即答した。
「竜害警報が発令されれば混乱は避けられない。思わぬ事故に巻き込まれて逃げ遅れることも多々ある。そういった二次災害を知らないわけじゃないだろう？」
そこまでは理解している。しかしそれだけでは説明が付かない。
「それにしても多過ぎませんか？」
「竜による直接的な被害と竜害によって発生した人災が別枠で処理されていることも知っているだろう？　例えば最近なら竜害に便乗した窃盗団なんかが有名だな」
僕は鷹揚に首肯する。マーキスさんは話を続けた。
「ほとんどの緩衝区では竜による直接被害よりも間接被害のほうが深刻なんだ。建造物の破壊はともかく、死傷者の大半は人災によって生み出されている。そしてこういう場合は竜害による死傷者として発表されない」
「どうして……そんなことに？」
僕は渇いた声を絞り出した。報道では伝えられていない真実である。
「緩衝区が無法地帯に成りつつあることを隠すためだろう。それに真実を伝えることが必ずしも正しいとは限らない。週刊誌で騒がれる程度の嘘か本当か判然としないくらいが一番いいのさ」
「しかしそれだと弱い立場の人が救われません」
僕の訴えに別方向から声が上がる。マーキスさんが寝台の怜司さんへ視線を落とした。
「この時代に弱者を救ってどうなる？」

「どういう意味ですか？」と口調を荒げてしまう。
こういう時代だからこそ皆で協力しなければならないのだ。弱肉強食を簡単に認めるわけにはいかない。
「大都市で暮らせるほどの経済力もなく、討伐部へ入り竜と戦う度胸も体力もなかった。そんな無能な連中を救ってどうなる？　守るべきは世界の枠組みで弱者じゃない」
「そんな言い方はあんまりです」
訂正を求める僕に怜司さんは酷薄な笑みを浮かべた。
「一つ教えといてやる。戦場で厄介なのは己の力量を理解していない勘違い野郎だが、仲間を危険に巻き込む可能性が高いのは正義感の強い糞野郎だ。七課に必要なのは竜に対抗できる装備と戦力で英雄志願者じゃない」
憤りを隠せない僕は怜司さんを睨み付ける。見兼ねたのであろうマーキスさんが仲裁に入ってくれた。しかしその対応はどっちもどっちといった扱いである。
「その辺にしておけ」
「世間知らずのお子様に『誠意とは金のことだ』と教えてやってるだけだろ？」
「その長広舌な口を閉じろ」
しかし一拍後、僕に対しても苦言が呈される。
「だが怜司の言い分も間違ってはいない。戦場から常に生還できるのは映画の主人公だけだ。そんな虚像に自分自身を投影していたら命がいくらあっても足りない」
「僕は……映画の主人公だなんて思っていません」
反論する僕に怜司さんが辛辣な言葉を投げかけてくる。
「頑張れば世界を変えられると思っているだろう？　その時点で駄目なんだよ。一人の力で変えられる世界なんて存在しない。もしあるとしたら、どんだけ狭い世界なんだよ。世界の枠組みは決して変えられない。だからこそ世界平和は絶対に訪れないのさ」
ぐうの音も出ない。しかしそれでも僕は黙っていられなかった。

「諦めたら終わりじゃないですか？」
「諦めが肝心という言葉もある」
澄ました顔で怜司さんは告げる。おそらく会話が成立することはないだろう。そう判断した僕は野営陣を立ち去ることにした。時間を浪費してまで嫌な思いをする必要はないからである。
「失礼します」
一礼して僕は来た道を舞い戻る。こうして研究者候補生としての初日は幕を閉じた。これからどんなことが起こるのか想像したくもない。

七話

繁華街の地下にあるＢＡＲを待ち合わせ場所に指定した。常連客と呼ばれるほど足を運んでいたわけではないが、それでも店主や従業員に顔を覚えられる程度には通っていた店である。内装や肴の趣味はともかく、安全性と利便性については保証済みだ。

「女の口説くには最低の場所じゃないか？」

カウンターへ案内された千秋は席に着くなり不満を口にした。その言い分は概ね当たっている。お洒落とは無縁の装飾。おまけに店内は非常に薄暗く景気の悪い音楽が流れている。限りなく経費を削減することで低価格を実現させている店なのだ。客層は言わずもがなで、社会的に優秀とは言えない連中で占められている。こういう嘘と真実が混在している場所では誰も話を鵜呑みにしない。だからこそ突飛な真実を語るときに最適なのである。

「口説き落とせないとわかっている女に高い酒を飲ませてやる必要はないからな。というか千秋に常識的な感性があったことに驚きだ」

俺は千秋の右隣の席に腰を下ろしながら軽口を返しておく。

「どういう意味だよ？」と美女は怪訝そうな表情を浮かべる。

「女はこういう店を好まない――という一般的な女性の思考だよ」

「とりあえず怜司の誘った店を批判したかっただけだよ」

千秋は憮然とした表情で言葉を吐き捨てた。ほぼ同時に度数の高い琥珀色の酒と小皿に乗せられた料理が運ばれてくる。俺は従業員が席を離れるのを見届けてから話を先に進めることにした。しかし俺よりも早く美女の妖艶な唇から言葉が紡がれる。

「随分と新人に絡んだらしいな」

「世間知らずのお子様に『誠意とは金のことだ』と教えてやっただけさ」

応じながら俺は盛大に肩をすくめた。どういうわけか千秋は憂いの帯びた瞳をこちらへ向けてくる。前置きもなく憐れまれるのは意

味不明に切れられるより怖ろしい。俺としては是が非でも理由を聞き出す必要があった。

「新手の嫌がらせか？」

「そうじゃない。ただ――いつまで過去に囚われるつもりなんだ？」

黒髪の美女は真剣な面持ちをしている。なんとなく嫌な予感しかしない。

「どういうことだ？」と問い返しておく。

「怜司が極端に正義感の強い奴を嫌うのは、唯一の肉親である妹を殺されたからだと聞いた。実力より正義感が先行すれば誰かが死ぬ――それを痛いほど理解しているからこそ厳しく当たるんだろ？」

隣に座る美女はこれまで見せたことのない表情をしている。今なら難攻不落の城門を開かせることができるかもしれない。しかし対応を誤れば命の保証はないだろう。だから俺は道化らしく安全な道を選択しておく。

「元殺し屋の狙撃手に過去を蒸し返される覚えはないさ。最後の仕事で恋人を射殺したことを悔やんで足を洗ったんだろ？」

「……なんの話だよ？」

千秋は路傍に放置されたゴミを見るような視線を向けてくる。話の本筋を煙に巻くために俺は真実を混ぜた物語を展開させていく。この手の情報操作能力もいい加減どこかで評価されてもおかしくないだろう。

「一課のアシュレイに聞いたんだろ？」

「怜司も？」と美女は驚きを隠さない。

俺は大げさに溜め息を吐いてから告げる。もちろん表情に徒労を装うことも忘れない。

「つまりこういうことだ。俺たちは二人してアシュレイ＝インザーキに担がれたのさ」

「……まさか？」

にわかには信じられないという顔の美女。俺は神妙な面持ちで演技を続ける。

「いやいや、俺もアシュレイから千秋の過去話を聞かされたんだぞ？　どういう目的なのかは判然としないが、少なくとも奴が他人の過去を吹聴しているのは確かだろう」

上手い嘘というのは大きく分けて二通り存在する。一つは真実の中に最も重要な部分だけ嘘を混ぜる方法。そしてもう一つは真実を用いず嘘だけで構築する方法だ。嘘が下手な連中は総じて中途半端に嘘を混ぜたり真実を伝えたりする。

「情報操作にしては露骨過ぎよね？」と千秋は眉根を寄せた。

「確かにな」

俺は琥珀色の酒を口へ運びながら相槌を返しておく。戦闘に関する知識はそれなりに豊富だが、一般的な駆け引きは高等科の学生と変わらない。あとは適当に酒を飲ませて過去話なんて一切存在しなかったことにしておこう。

不意に――背後から声を投げかけられた。

「おいおい、仕事の話が終わる前に飲むなよ」

俺と千秋は反射的に懐に忍ばせた自動式拳銃に手を伸ばしながら振り返る。すぐ後ろに肩の高さまで両手を上げた金髪碧眼の男が立っていた。

「立ち聞きは感心しないな」と軽口を返す俺。

「アアアアシュレイじゃないか！」と露骨に挙動不審な態度を見せる千秋。

あわあわ言いながら小皿に盛られた料理を口へ放り込んで派手に噎せていた。どうやら嘘を吐くのが死ぬほど苦手らしい。俺は金髪碧眼の男――アシュレイに先を促した。

「頼んでいた件はどうなった？」

「結論から言えば限りなく黒に近い灰色だ」

アシュレイは隣の席に腰を下ろしながら応じる。想定の範囲内なので驚きはない。しかし反対隣の千秋が「おい」と小声を発しながら肘打ちを食らわしてくる。

「どうした？」とこちらも反対側へ聞こえないよう囁き返しておく。

「どうしてアシュレイがここにいる？」
　不安と驚きを四対六の割合でブレンドしたような表情を浮かべて美女は問い質してくる。ここで話をはぐらかせようとしても墓穴を掘るだけだろう。俺は千秋とアシュレイを交互に見やってから真相を語る。
「実はアシュレイに小竜の件で動いてもらったんだ。やはり竜害警報中の緩衝区に出没するのはおかしいからな。ちなみにアシュレイから聞いたという過去の話は俺の創作だ。ついでに言うとアシュレイに話した俺の過去も俺自身の創作だったりする。なにを言ってるのかわからないと思うが、俺もなにを言ってるのかさっぱりわからないから安心しろ」
　当然のように不穏な沈黙が訪れる。しかし俺はあくまで軽口で押し通した。
「まあ、要約すると俺に妹はいないということだ」
「とりあえず死ねよ」と千秋は辛辣な感想を述べる。
「……相変わらずだな」
　アシュレイは嘆息を漏らしながら美女へ視線を向けた。
「真偽も確かめずに迷惑をかけてすまない」
「気にする必要はないよ。死ぬべき奴は決まっているからね」
　千秋は琥珀色の酒を飲みながら俺を一瞥する。仕方がないので俺も酒と料理を胃に流し込んでおく。胃を焼くような熱さが気分を高揚させる。アシュレイはやれやれという風に肩をすくめていた。
　ともあれ閑話休題。
「早速で悪いが報告を聞かせてもらっていいか？」
　唐突な質問にもアシュレイは動じることなく内容を述べる。
「小竜は読み通り養殖ではなく天然だった。調査部の連中は自己顕示欲を充たすための飼育か研究目的という見解で一致している。もちろん誰一人として怜司の提唱する『テロ組織による生物兵器案』を支持していない」
「んんん、もう少しわかるように説明してくれない？」

本題について来れない美女が小首を傾げる。俺は密度より理解度を優先して説明した。

「つまり俺は竜を生物兵器と睨んでいるわけさ」

「はい？」と首の角度が九十度近くまで曲がった。

超怖可愛い。

「ホエールインパクト以降、世界が一変したことは理解しているよな？」

「そこまで基礎から説明しなくていい」と美女は言葉を吐き捨てる。

「数多くの未確認生物が発見されたわけだが、竜のように空想上の生物が発見された例はほかにない。俺はこの点に疑問を抱いているわけで、竜はテロ組織によって生み出された生物兵器じゃないかと考えている。つまり真相は世界の変貌に付け込んだ大規模な無差別テロというわけさ」

「そんな技術がテロ屋にあるとは思えないけどね」

琥珀色の酒を煽りながら千秋は否定的な見解を述べた。調査部の研究者もそう判断しているのだから、どちらかと言えば美女の意見が多数派なのだろう。しかしアシュレイは生物兵器案に肯定的な補足を付け加えた。

「そうとも言えないんだ。法外な報酬さえ払えば仕事を選ばない研究者はどこにでもいるし、完全に操作可能な生物兵器はともかく、巨大で暴虐を尽くすだけの生物なら現在の技術力でも人工的に作り出すことができる」

「……それって？」と千秋は不愉快そうな表情を浮かべる。

「自由意志で暴れる生物兵器なわけだから、特定の場所や期間を狙った戦略的テロには向かない。しかし無差別テロなら怖ろしい脅威となる。それに無差別テロという隠れ蓑が犯人の特定を困難にしていることも厄介なのさ」

俺の解説を聞き終えるが早いか美女は琥珀色の酒を口へ運ぶ。溶けた氷が重なり小気味のいい音を立てる。アシュレイは「大丈夫？」と千秋を心配してから俺へ向き直り本題へ入った。

「今回の個体からも祖先に繋がるような遺伝子は発見されなかった。研究者は口を揃えて『ホエールインパクトによる影響』と言い張っているけどね」
「ほかの未確認生物は亜種や突然変異を含めて惑星上の生物という結果が出ているんだろう？」
「ああ。未だに証明されていないのは竜だけだ」
「それなら人為的に生み出された可能性も考慮すべきじゃないのか？」
俺の詰問にアシュレイはやれやれという風に肩をすくめた。
「そんなに納得がいかないなら調査部第三研究室の宮原紗季に直接問い合わせればいいじゃないか？」
「その名前を口にするな」
「どんな別れ方をしたのか知らないが、昔の恋人を悪く言うのはやめたほうがいい」
アシュレイは澄ました顔で持論を展開する。しかし次の瞬間――千秋が口に含んでいた酒を盛大に吹き出した。ごほごほと咳込みながらも追求の手を緩めない。なんというか綺麗な顔立ちを最大限に活かさない奴である。
「ごほっ……なにかの……ごほっごほっ……罰ゲームだったのか？」
「違う」と俺は端的に否定した。
「いや……私が言いたいのは……ごほっ……宮原側が罰ゲームかってことだよ？」
「わかってる――というのもなんか心外だが間違ってない。付き合ったのはあいつに課せられた罰とかじゃねえよ」
宮原紗季については恒例の長広舌も鳴りを潜めてしまう。それを敏感に察したらしい美女が悪魔の如き笑みを浮かべた。
「仕方ない。今度調査部を訪問するときに面でも拝んで来てやるよ」
「お前は中等科の女子か！」と電光石火の突っ込みを入れておく。
しかし千秋は突っ込みを華麗に無視して琥珀色の酒を追加注文する。これはもう苛めと認定すべき事案だろう。頃合いを見てアシュ

レイが席を立ち上がった。
「さてと、俺はこの辺で帰るとするよ」
「一緒に飲んでいけばいいじゃないか？」と美女が甘ったるい声で告げる。
　これまた新手の嫌がらせだろうか？　しかしアシュレイは首を左右に振って微笑む。
「明日は朝から国賓の警護なんだ。この埋め合わせはまた今度させてもらうよ」
「それなら仕方ないね」
　俺の突っ込みは無視するくせに金髪碧眼の男には猫撫で声を使うのかよ。というような突っ込みを入れるまでもなく、単純に酔いが回り始めたのだろうと理解する。今なら豊満な胸や形の良い尻を撫で回しても許されるかもしれない。俺が邪な思索に耽っているとアシュレイは別れ際に不吉な言葉を発した。
「本気で調査部へ異動する気はないのか？」
　数瞬の沈黙。調査部への勧誘なら何度も断っている。
　数瞬の逡巡。即答できないのはなぜだろう？
　しかし俺の出すべき答えは最初から決まっていた。
「ないさ」と俺は肩をすくめて応じる。
「わかった。上には『勧誘したが断られた』と報告しておく」
　景気の悪い音楽が流れる室内を金髪碧眼の男は静かに歩いていく。その背中に視線を送っていると、千秋が二杯目を胃に流し込みながら疑問符を吐き捨てる。
「お前、調査部から勧誘されてたのか？」
「まあな」
「どうして断る必要がある？」
「そんなことを言い出したらマーキスは五課の課長補佐を袖にした大馬鹿野郎だぞ？」
　美女が琥珀色の酒を煽る。俺も酒と料理に手を伸ばした。
　どういうわけか静かな時間が訪れてしまう。

「ひょっとしてマーキスや俺が評価されていることに傷付いたのか？」

あくまでも冗談っぽく千秋の本音に探りを入れる。二杯目を飲み終えた美女は三杯目を注文してから言葉を絞り出した。

「そうじゃない。ただ――」と千秋は顔を伏せる。

「ただ？」

俺は息を吐くように問い返した。こういう場合は先を促すのが礼儀だろう。

「マーキスや怜司は常に全体のことを考えている。それに比べて私は竜と戦うことに生き甲斐を感じているだけかもしれない」

「それでいいんじゃないか？　俺も俺が気になるから独自に調査しているだけだ。全体の利益や七課の利益を考えて行動しているわけじゃないさ」

俺は飲み終えたグラスを差し出して追加注文する。ほどなくして度数の高い琥珀色の酒が目の前に置かれた。千秋は浮かない顔のまま三杯目を口へ運んでいる。この雰囲気を変えるには多少の暴挙も必要かもしれない。

「とりあえず抱いていいか？」

「その前に私をここへ誘った理由を教えてくれないか？」

「それはつまり教えれば抱いていいってことだな？」

「殺す前に聞いておきたいだけだよ」

しれっとした顔で千秋は怖い台詞を口にする。俺は当然の回答を返すことにした。

「教えれば殺されるとわかっている状況で話すと思うか？」

「それなら苦痛を与えながら殺す」

「わかったわかった。話せば殺さないという条件で手を打ってやるよ」

お手上げの格好を決めて俺は盛大に嘆息を漏らした。美女は懐へ伸ばしていた手をグラスへ向かわせる。酔った勢いで引き金を絞られたら本気で洒落にならないからな。

「知って損をするような情報じゃないと判断したからだよ」
「それは私を誘った理由にはならないだろう？」
グラスを傾けながら千秋は賢しい発言を返してくる。酔いが回ると頭が冴える変態なのだろうか？　しかしまあ、どちらにしても俺からの回答は決まっていた。
「どうせなら綺麗な女と一緒に飲みたいという打算も含まれているわけさ」
「無料で酒が飲めるなら怜司と一緒でもいいかと判断した私も似たようなものだね。仕方がないから今日は怜司の財布が空になるまで飲んでやる」
氷を指で掻き混ぜながら美女は妖艶な笑みを浮かべる。酔うと色っぽくなる女は嫌いではないが、千秋の場合、艶やかなのか頭の螺子が緩んでいるだけなのか判然としない。
「安心しろ。俺の資金は千秋が二杯目を頼んだ時点で尽きている」
「……」と美女は金魚のように口をぱくぱくさせている。
やはり頭の螺子が緩んでいるだけらしい。俺は琥珀色の酒を口へ運びながら苦笑する。
「美貌の不法投棄はそう辺にしておけ」
もちろん支払いは電子決済が可能なので問題ない。

八話

その日、僕は超常現象対策局の屋内訓練場がある施設を訪れていた。主な任務は竜討伐絡みなのだけど、それと平行して対人用の訓練も行われている。そんなわけで研究職である僕も演習に強制参加させられているのだった。

もちろん七課第一部隊の面々が招集されているのだけど、相変わらず訓練に適した格好をしている人物は一人もいない。しかし唯一代わり映えしたと言えば、黒チャイナドレス姿から普段着と思われる白のブラウスと黒いタイトスカート姿になった千秋さんだろう。なんとなく女教師や女秘書を連想させるが街を歩いていてもおかしい格好ではない。

「内容は二人一組で多人数同時参加型の乱戦、そして二人一組で最後まで残れば勝利という条件だ。つまり一人だけ生き延びても無意味だから協力して行動するようにな」

簡単に説明を済ませると、マーキスさんはネームプレートを投入した箱を混ぜ始める。最初に引き出されたプレートには「シェリル・ハートフィリア」と書かれていた。

「千秋姉様」とシェリルさんは両手を合わせて祈る。

しかしその願いは儚く散って、次のプレートには「架神怜司」と書かれていた。マーキスさんは二人のプレートを重ねてチームAとする。そんな調子でチーム編成が行われて、最終的に三組のチームに分けられた。

A、シェリル・ハートフィリア＋架神怜司。

B、天宮千秋＋ジェシカ・キャンベル。

C、彩吹マドカ＋秋山涼。

「新入り二人が分かれたのはよかったな」

マーキスさんはチーム編成を確認して満足げな表情を浮かべた。確かに僕の存在は負担にしかならないだろうから、相棒まで戦闘に

不向きな人物だと話にならないだろう。しかしそう考えるなら僕とジェシカが含まれていないチームAが有利ということになる。
「無作為に編成するより力関係が均等になるように分けたほうがよくないですか？」
ふと僕は当然の疑問を口にしていた。するとマーキスさんではなく気だるそうに伸びをしながら千秋さんが応じる。
「均等な振り分けだと実戦じゃ役に立たないからね。与えられた状況下でどうするかを考えることに意味がある」
確かに、その通りだった。そもそも力関係が均衡している場合は戦闘に発展し難い。勝てるかどうかわからない勢力に事は構え辛いからだ。
「武器もチームごとに違うから確認を怠るなよ。死亡判定は俺がモニターを見て判断するから通信を聞き逃さないようにな。それじゃあ、各チームとも三十分後には所定の位置に着いてくれ」
そう告げてマーキスさんは管理室へ歩いていく。僕はマドカと一緒にチームCの控え室へ向かった。無機質な空間の中に会議に使われそうな巨大な円卓が設置されている。その上に回転式拳銃と六発同時装填を可能とする専用器具、さらに自動式拳銃とペイント弾が装填されたマガジンが五つ置かれていた。
「使用武器と弾丸の配分は自由なんだよね？」
「……そう」と小柄な少女は小さく顎を引く。
本来ならマドカが仕切るべきなのだろうけど、なんというか積極的に行動してくれそうな性格には見えない。そんなわけで素人である僕から話を切り出すしかなかった。
「どうしようか？」
「……どれくらい扱えるの？」とマドカが武器に視線を落としながら呟いた。
初めて疑問文が返ってきたような気がする。なんとなく会話が成立しているような感じがして、ついつい僕は柄にもなく自動式拳銃を気障っぽく構えてみた。

「……全然、駄目」と一蹴される。
次いで小柄な少女は僕の後ろに回った。背後から身体の向きや銃の構え方を調整してくれる。両足は肩幅まで広げられて少しだけ腰を落とすように指示された。もちろん片手ではなく両手を使って銃を安定させる。適当に構えていたときに比べて、なんとなく銃口の位置が固定されているような気がした。
「……それでいい」
「少しは役に立てるかな？」と質問してみる。
「……期待はしていない」
絶句するしかない。僕は未練たらしく疑問符を投げかけた。
「そこまで否定しなくても？」
まだ短い付き合いだけど、マドカは冗談や嘘を吐いたりしない。だからこそ僕は半泣き状態になっているのだった。まったく期待されていないというのは、たとえそれが当然のことであったとしても辛いものである。
「……そもそも素人が銃を撃っても当たらない」
マドカは回転式拳銃を手に取りながら告げた。目と鼻の先というような至近距離ならともかく、確かに移動する標的を狙い撃つとなれば相当な訓練が必要だろう。特に警戒しながら行動する演習においては、素人である僕がなにかしらの活躍をするほうがおかしいのかもしれない。
「……覚えて」
そう言って小柄な少女は訓練施設の見取り図を差し出してきた。僕は受け取って確認する。様々な状況を想定して訓練が行えるよう設備の充実と広さは半端ない。今回使用する区画だけでも、ちょっとした商業施設がすっぽりと収まるだろう。
「行き止まりや死角を覚えればいいの？」
「……そう」
特に意外そうな顔をするわけでもなくマドカは端的に正解を宣言した。僕は再び地図に視線を向ける。強襲のような敵地へ赴く作戦

の場合、突入から退却までの手順を事細かに決めておく。目的を達成した時点で七割成功、無事に帰還して任務完了となるからだ。
「焦って行き止まりに逃げ込むような事態に陥らないよう頑張るよ」
「……囮や陽動に利用する場合もある」
「敵に追い込んだと思わせておいて、さらにその後ろから仲間が制圧するみたいな感じ？」
「……そう」
実際はそれほどでもないんだろうけど、なんか随分と長い時間を会話に費やした気分になる。マドカに「……これ」と促されて僕は専用革袋の付いた腰帯を装着した。手にした漆黒の自動式拳銃にペイント弾入りマガジンを装填する。制服姿の少女も専用革袋付き腰帯を装着して回転式拳銃にペイント弾を込めていく。さらにマガジンから取り出したペイント弾を六発同時装填の器具へセット。一通りの準備を終えるとマドカは控え室の出口へと向かっていく。
「ちょっと待った。まだ二つもマガジンが残ってるぞ？」
疑問符を投げかける僕に少女は首だけ振り返って応じる。
「……あなたの分」
「いや、素人が撃っても当たるものじゃないんだろ？　だったら今装填してる分だけで充分だよ」
「……戦場で弾薬が尽きることは死を意味する。当たるか当たらないかは問題ではない」
そんなことを言ってマドカは再び歩き始めた。僕はその小さな背中を見失わないように追いかける。

そこは工場跡地のような場所だった。巨大な機械が錆び付いた状態で放置されていて、周辺には鉄パイプや金属の部品が散乱している。床はコンクリートだけど、それ以外の足場は鉄で組まれていた。階段や中二階を渡る場所も慎重に進まなければ甲高い金属音を奏でることだろう。
「場所が悪いね」

「……そうでもない」
僕の呟きにマドカは否定の意を示した。とりあえず反対しておくという性格ではないので、おそらくこの場所になんらかのメリットを見出しているのだろう。
「どういうこと？」
「……足止めには悪くない」
そう言われて僕は改めて周囲を見回した。巨大な機械を利用して隠れられそうではあるけど、全体的に開けているので足止めに向いているとは思えない。見晴らしのいい平原に大きな岩が数個あるようなものだ。
「巨大な機械を上手く利用するのか？」
小柄な少女は否定の動作。僕は改めて疑問符を投げかける。
「それじゃあ？」
「……ここで待ち伏せがあるかもしれないという疑念を抱かせればいい」
「随分と他力本願だな」
「……そうでもない」
そう言うが早いかマドカはペイント弾の装填された回転式拳銃を構える。その流れで引き金を絞って発砲。高速の弾丸は巨大な機械に衝突して青色のペイントを撒き散らした。制服に身を包んだ少女は照準を移動させながら連射。六発の弾丸を四秒で撃ち切る。それぞれが様々な場所へ着弾して青色のペイントを飛散させた。
「……」
沈黙する僕を尻目にマドカは空薬莢を排出。すぐさま専用器具を使って六発を同時装填。コンクリートの床に空薬莢が落下して甲高い金属音を奏でながら転がる。
「……ここで戦闘が行われていたと思わせればいい」
小柄な少女は移動しながら説明した。そして今度は先に発砲した軌道の反対側から六発を射撃する。青色のペイントはまるで撃ち合いでも行われたかのような惨状を演出していた。この状況に遭遇し

たら戦闘に長けた面々でも足が止まるかもしれない。
追いついた僕は少女にマガジンを差し出した。
「……必要ない」
「でもこれは二人で仕掛けた罠のようなものだから、僕のペイント弾が減らないのはおかしいだろう？」
無言の少女に僕は半ば強引にマガジンを手渡した。それから誰かさんよろしく軽口を返しておく。
「ちょっとくらい僕にも手柄を分けてくれてもいいだろう？」
「……そう」
マドカが納得してくれたところで、耳に提げた通信機にマーキスさんの声が響いた。それは演習開始の合図であり、今この瞬間から襲撃に備えなければならない。僕は周囲を警戒しながら相棒の少女に話しかけた。
「どうしよう？」
「……C八二五地点」
それは地図に細かく振られた区分の一つで、位置的にここから階段を上れば行き着く場所である。移動を始める前にマドカから簡単な指示が飛ばされた。
「……移動時は背中を合わせるようにして死角を消す」
少女が先に歩き始めたので、僕は後ろを警戒しながらあとを追う。二人一組や三人一組の基本隊形は把握しているつもりだが、それでも自分自身が行うと教科書通りにいかないことがよくわかった。やはり実戦や実務でしか得られない経験というものがあるのだろう。慎重に階段を上がっていくと、不意にマドカが身体を屈めた。
「……最悪」
そう呟いた瞬間、少女は階段を駆け上がる。そのままコンテナの影まで駆け抜けた。その直後、僕の頭上をペイント弾が通過してコンクリート壁を青色に染める。マドカは前方に牽制射撃を行いながらこちらへ来いという合図を送ってきた。二人で生き残ることが勝利条件なので、バラバラで行動するのは危険と判断したのだろう。

僕は少女を真似るように階段を上がりコンテナまで駆けた。マドカは空ヤッキョウを排出して新たなペイント弾を六発同時装填する。一階部分を作業場と想定するなら、ここは資材置き場という風情だった。いろいろなものが乱雑に積まれているので身を隠す場所には困らない。

「……チームB」

小柄な少女は交戦中のチーム名を教えてくれた。確か千秋さんとジェシカである。チームAと当たるより運がいいのかもしれないが、いきなり交戦になること自体が相当に運が悪い。

「……仕掛ける」とマドカは呟いた。

勝利すれば銃器や残弾を得ることができるので、どちらかが弾切れを起こしてからの勝利は避けたい。それは向こうも同様なので、結果として短期決戦に繋がる。

「……援護を」

言うが早いか少女はコンテナから飛び出して射撃。前進しながら次の物陰を目指して駆けた。僕は無防備のマドカを狙い撃ちされないよう前方へ向けて発砲。もちろん援護になるような弾道ではないのだけど、それでも銃声と着弾が続く限り敵も顔を出して狙い撃つという行動は取り難い。

無事に安全地帯へ逃げ込んだ少女は「前進」の合図を送ってくる。どうやら距離を詰めることで威嚇するつもりらしい。僕は「了解」の合図を送り返しておく。それを確認したマドカは次の物陰へと移動を開始する。もちろん僕は援護になるかどうかはともかく牽制射撃を怠らない。

しかし次の瞬間、物陰からジェシカが立ち上がり短機関銃を乱射して弾幕を張った。けたたましい銃声と着弾音。それに排出された空薬莢がコンクリートの床に落ちて甲高い金属音を奏でる。狂想曲の中で周囲の景色が青色に染められていく。なんとか次の安全地帯へ到着したマドカだけど、しかしその肌や服には大量の青色ペイントが付着していた。

「直撃していない」
不意に通信機からマーキスさんの声が流れた。それは少女の生存を意味していて、こちらとしては思わぬ奇襲を回避できたことになる。反対に向こうは切り札を晒してしまったわけだ。それにしても短機関銃が出てくるなんて、ちょっと武器の配分に差があり過ぎなんじゃないだろうか？
ともあれ一時的な均衡状態が訪れる。
そこで僕は冷静に武器配分の差を分析した。向こうは短機関銃の乱射で弾に余裕がなくなっている可能性が高い。短機関銃を所持している上に弾数も多いとは考え難いからだ。僕は独断でジェシカが身体を潜めた辺りに連続発砲。資材や機械が散乱する場所を青色に染めた。
反撃や移動する気配は感じない。僕はコンテナを出て前方の安全地帯へ移動した。意図を理解してくれたらしく、マドカは援護射撃を行えるように銃を構える。僕は慎重に前進を続けて少女と会話が可能な距離まで近付いた。
「向こう弾切れを起こしているんじゃないかな？」
「……わからない」
マドカは端的に返答する。しかし弾数に余裕がないという判断には同感らしく、小柄な少女は一気に片を付ける作戦を選択した。
「……移動する人影があったら撃って」
そう告げてマドカは射撃しながら前方へ突っ込む。僕は胸の前に拳銃を構えて発砲の機械を待つ。このままなにも起こらないとは考え難い。必ず起死回生の一手を放ってくるはずだ。
刹那――物陰から人影が動いた。武器を所持していない白銀髪の少女である。これは少しでも移動速度を上げるための配慮なのか、あるいは短機関銃を千秋さんに渡しているのか判然としない。しかしそんなことは重要ではなかった。逃げるジェシカを仕留めれば勝利が確定する。僕が銃口を向けるより先にマドカが発砲した。
ペイント弾は白銀髪の少女を捉える直前に突起物を掠って破砕。

飛び散った液がジェシカを青色に染めるが、通信機から「直撃していない」という無情な声が聞こえた。次の瞬間、別の場所に身を潜めていた千秋さんが立ち上がりマドカへ銃口を向ける。しかし照準を合わせ切る前に僕の自動式拳銃がペイント弾を発射していた。

「直撃だ」

通信機から死を意味する言葉が紡がれる。ペイント弾とはいえ直撃すれば衝撃は大きいだろう。しかし僕は声をかけることもできずに呆然と立ち尽くしていた。千秋さんは「これも訓練の一環だ。気にする必要はないよ」と告げて口を押さえる。小柄な少女はくるりとこちらを向いて「……問題ない」と呟いた。

そう――僕の放った弾丸は相棒であるマドカの後頭部に直撃したのだった。ついに堪え切れなくなったのか千秋さんが大笑いする。それを機にジェシカまで吹き出したため、周囲は自然と和やかな雰囲気に包まれた。

九話

仲間を撃ってしまうという失態でチームCの敗退が決定後、僕とマドカはマーキスさんのいる中央管理室で続きを観戦する運びとなった。複数のモニターに全区分が映し出されていて、さらに人影を捉えた映像は中央の巨大な画面に表示される。音声も自動的に拾ってくれるので、状況を把握するだけなら現場よりも都合がいい。

「僕たちの武器と残弾をチームBが手に入れたとしても、まったく弾を消費していないチームAのほうが有利ですよね？」

まるでスポーツ観戦の実況よろしく僕はマーキスさんに解説を求めた。ドレッドヘアーの大男は画面を眺めたまま応じる。

「そうとも限らんぞ。死亡判定は当事者の通信機にしか送っていないからな。つまりチームBにはチームCがもう存在してしないことを知っているというアドバンテージがあるわけだ」

「それって……結構重要な情報ですね」

警戒すべき敵の数を把握しているだけでなく、チームAが立て難い作戦をチームBは実行することができる。例えば二手に分かれるといった方法だ。上手くいけば敵の背後を取れる策だけど、チームCの不在を知らなければ怖くて採用できないだろう。ふと気になったので僕は質問を投げかけてみる。

「勝率の高い組み合わせとかあるんですか？」

「ある意味でらしいのかもしれないが、目の前で行われている実戦より数字が気になるのか？」

マーキスさんが苦笑を浮かべながらこちらを向いた。僕は不躾な質問をしてしまったことを恥じながら否定の動作。確かに今優先すべきは継続されている演習の行方である。

「……気に病む必要はない。結果に一喜一憂するより分析することが肝要」

「そうなの？」

助け船を出してくれた少女に僕は疑問符を投げかけた。マドカは少しだけ顎先を引いて首肯する。

「……そう」

「まあ、確かに俺たちの仕事は長期的に考えるべきかもしれないな。前回は負けたが今回は勝ったと短期的に捉えても仕方がない。どうすれば効率のいいシステムを構築できるかが重要なわけだからな」

声は穏やかだけど隊長の瞳は憂いを帯びていた。ホエールインパクト直後の苛烈な状況を思い出しているのかもしれない。その傍らで小柄な少女が端末を操作している。しばらくすると質問に対する回答を導き出したらしく、解説者には不向きと思われる小声で抑揚のない口調で言葉を紡いでいく。

「……二人一組の最高勝率はマーキス・ウォーレン＋ハーライル・マッケネイ。七課に絞ればシェリル・ハートフィリア＋私の組み合わせになる。ただしこれは演習回数が少ないので参考にならない」

「へえ、意外な組み合わせだね。というかマーキスさんが歴代記録保持者なんですか？」

「ここへ来るまで俺とハーライルは屋内戦の専門家だったからな。それに比べればシェリルとマドカの勝率は才能を感じさせる数字だ」

マーキスさんが簡単に補足する。少し踏み込んだ話を聞いてみたかったのだけど、こちらから過去について質問することは憚られた。

「直撃していない」

不意に隊長は通信機をオンにして告げる。その声に釣られて僕はモニターへ視線を移した。画面には青色のペイントが髪と顔にかかったシェリルさんが映し出されている。しかしマーキスさんの判断によれば直撃はしていないらしい。もう一つの画面には先制攻撃を仕掛けたと思われる千秋さんが表示されていた。

不意打ちを回避したチームＡの二人は、数瞬の会話を交わしたあと二手に分かれる。どちらを狙うか絞り切れない千秋さんとジェシカを尻目に怜司さんとシェリルさんは通路まで逃げ延びた。

「本当に当たってなかった？」

ほどなくして女教師風の千秋さんが耳から下げた通信機に愚痴る。
「贔屓はしない主義だ」
ふむと一拍置いて美女は悪戯な笑みを浮かべた。
「雑談中で画面を見てなかったとかじゃないでしょうね？」
「そんなことあるわけがないだろ」
ぎくりとする発言をマーキスさんは軽やかに一蹴した。本気で判定に不服があるわけではないらしく、千秋さんは傍らのジェシカに次の作戦を指示している。実力が均衡していれば即座に追跡していたのだろうけど、白銀髪の少女は僕に毛が生えた程度の実力だから無理できなったのかもしれない。
千秋さんとジェシカは立ち上がり背中を合わせながら移動を開始する。二人の姿は残念ながら追跡者のように見えない。おそらく同じ場所に留まれば思わぬ反撃を受けると判断しての移動だろう。つまり主導権は先制攻撃を行ったチームBではなく、それを上手く回避したチームAに移っていると考えられた。
「今日は予定よりも早く終わるかもしれないな」
「なにか思うところがあるんですか？」
僕は相槌を打つように話を進める。
「いつも以上にシェリルが冴えている」
「それで千秋さんが愚痴ったんですかね？」
「どうだろうな」
マーキスさんは嘆息を漏らしながら腕を組む。なにか思うところがあるらしいのだけど、それを聞き出そうとするのは野暮というものだろう。眺める先の画面の中では緊張感に包まれた光景が繰り広げられている。それぞれのチームが少しでも有利な状況で戦えるように工夫しながら行動しているのだ。
三十分が経過した頃、千秋さんとジェシカがチームCの初期位置に到着する。周辺の様子を見て二人の足が止まった。それはマドカの読み通りなのだけど、どうやら黒髪の美女がその意図を察したらしい。悪鬼の如く笑みを浮かべてチームBの初期位置へと移動し始

める。しかし白銀髪の少女はその背中を追わず、部屋の隅に設置された巨大な機械に身を潜めるのだった。
「待ち伏せて挟撃狙いですか？」
「……そう」
これまで無言だった少女が肯定する。ところが次の瞬間、予想外の出来事が起こった。爆音とともにジェシカの隠れた周辺に青色のペイントが飛び散り爆ぜる。超反応で音の方角へ銃口を向けた千秋さんは、やがて銃を下ろして長い長い黒髪を掻き乱した。
「直撃だ」とマーキスさんが通信機に告げる。
その後に開催された反省会で、罠として用いることのできる手榴弾（もちろん中身はペイント）の存在を知った。なんとも馬鹿っぽく見えた決着も、どうやら入り組んだ駆け引きの妙らしい。録画映像を見ると罠はチームBとチームCの交戦中に設置されていた。
「シェリルの活躍が局面を左右すると思っていたんだがな」
マーキスさんは画面を見つめながら予想が外れたことを悔やむ。
「実際に間違ってはいないだろう？　シェリルが千秋の初弾を回避したことで勝てたようなものだからな。最後の罠はおまけみたいなものさ」
そう言って怜司さんは肩をすくめた。当の本人であるシェリルさんは千秋さんに絡み付いて「薄い本」がどうのこうのと話している。黒髪の美女が迷惑そうに聞き流しているところを見ると、なんとなく今回の演習とは無関係の話題なんだろうなと推測された。
「千秋、新人と組んだ感想は？」と隊長。
「これまで組んだ新人の中では標準以上だね。もう少し経験を積んで臨機応変に動けるようになれば面白くなるんじゃないかな？」
「ほう。千秋が新人を褒めるなんてシェリルとマドカ以来じゃないか？」
真顔で語る怜司さんに僕は思わず突っ込んでしまう。
「それってただの褒め上手じゃないですか？」
「いやいや、珍しく褒めた二人がたまたま第一部隊にいるだけさ」

僕は改めて第一部隊の面々を見やる。しかしその直後、画面が切り替わり僕の失態映像が流れた。それを見た怜司さんは腹を抱えて笑い転げる。それはすぐに波及して反省会は爆笑の渦に巻き込まれた。

◇◇◇

秋山涼が七課第一部隊に配属されてから一ヶ月後。

世界政府の中枢が集結した総本部。敷地内には超常現象対策局の建物も数多く立ち並んでいる。その中に討伐部七課に与えられた職場もあった。広大なワンフロアを十二の部隊に分けて使用している。各部隊は机を合わせて、それぞれの班を形成していた。ほとんど消灯している部屋の中で、第一部隊に割り振られた場所だけが明るい。その一角でマーキスが端末に向かって候補生の評価レポートを作成していた。事前に与えられていた資料と実際に会ったときの印象の違いを思い出したのか苦笑いを浮かべている。

秋山涼――かの有名な生物学者で今は亡き秋山陽一博士の一人息子だ。どれほど優秀で生意気な人材が送られてくるのかと懸念していたが、どういうわけか第一部隊の連中と溶け込めるような変わり者だった。向上心はあるみたいだが、圧倒的な才能やカリスマ性は感じられない。俺は背後からマーキスに近付きながら端末の画面を覗き込む。評価は項目別にAからFの六段階。もちろん文章による総評も書かなくてはならない。これを月一回提出しなければならないのだから、新人教育を下に丸投げする上官が増えるのも当然だろう。

「過労死の準備か？」

「邪魔をするなら先に帰れ」

どうやら軽口に付き合えない程度には疲れているらしい。仕方がないので俺は真面目な話題を振り直しておく。

「どう評価するつもりなんだ？」

「面白い奴だが現場研修の結果は中の下くらいだろうな」
「……そうでもない」
不意に声をかけられて、マーキスは大柄な身体に似合わない小さな声を上げた。俺も反射的に身構えてしまう。ほかに誰もいないと思っていたのだから仕方ない。背後には制服姿の少女が立っていた。
「マドカも残っていたのか……驚かすなよ」
それを挨拶に代えると、マーキスは報告書の作成に戻る。マドカは迷うことなく涼の席に腰を下ろした。その席に用があるわけではなく、話を聞きやすい場所として選んだのだろう。なんとなく座る機会を逸してしまった俺は、一人突っ立ったまま無駄話を続けることになった。
「七課第一部隊で最もお喋りなマドカが言うなら間違いないな。おそらく秋山涼はとてつもない才能を持っているんだろう。もう二人で漫才コンビとか組んだほうがいいんじゃないか？」
「……あるある――ねえよ」
制服の少女は無表情のまま乗り突っ込みを返してきた。俺は肩をすくめることしかできない。
「乗り突っ込みをするなら、もっと乗り気なほうがいいんじゃないか？」
「……そう」
少女の興味は完全に失われていた。だから俺は軽口で抵抗しておく。
「ともかくあれだ。マドカが乗り突っ込みをしてくれたから四月二十一日は魔法少女記念日。どうしてなのか理由を知りたければシェリルに聞くといい。おそらく三日三晩かけて懇切丁寧に説明してくれるはずだ」
「怜司、お前もう帰れ」
マーキスの声には怒気が含まれていた。さすがに悪ふざけが過ぎたらしい。しかし俺が今ここにいる理由もあるわけで、簡単に応じて帰るわけにもいかないのだった。

「可愛い部下が相談に来てるんだから無下に扱うなよ」
「可愛い部下だと？」
背広姿の大男が半眼で睨み付けてくる。だから俺は率直にマーキスの勘違いを正した。
「俺じゃない。マドカのことだ」
「ああ」とドレッドヘアーの視線が反対側の少女へ向けられる。
「用件があるなら先に聞こう。報告書は明日の昼までに完成させれば問題ないからな」
「……そう」
小さく首肯してからマドカは言葉を紡ぎ始めた。
「……秋山涼はなにかを持っている」
「持っている？」とマーキスが怪訝そうに繰り返す。
少女の説明が終わるまで待ってもよかったのだが、今回は俺の用件と被るところがあるみたいなので割り込んでおく。
「通訳すると秋山涼の評価を低く報告して上層部の心証が悪くなるようなことはやめてということらしい」
「そういうことなのか？」
ドレッドヘアーの大男が少女に疑問符を投げかける。ちょっとは俺の発言を信用しろと突っ込みたいが、普段の言動を考慮すれば信じられるほうがどうかしているので黙っておく。
「……そう。少し表現は違うけど意味は合っている」
「ふむ」
マーキスは腕を組んで俺を振り仰いだ。
「怜司も同意見なのか？」
「まあな。半年の現場研修を終えれば一年の研究実務に移るだろ？どの研究室へ配属させるかが決まる重要な転機だ。しかしこのとき上層部の判断材料はマーキスからの報告書しかないわけだからな。中の下なんて評価じゃろくなところへ回されない」
「なにか企んでいるのか？」
背広姿の大男は呆れたように疑問文を返してくる。

「宮原の研究室へ送り込みたい」
「怜司の元恋人とかいう研究者か？」
「そんな深い関係じゃないさ。ただし研究者としての実力は保証する。おそらく真実に最も近い場所にいる存在だ」
「しかし人事は上層部と研究室側の問題だろ？　俺の報告書で決まるわけじゃない」
「まあ、その辺は俺の得意分野だからな」
「まさか本部のデータベースをハッキングして書き換えるんじゃないだろうな？」
　前例があるだけにマーキスの表情は険しい。しかしそんなことをする必要のない俺は涼しい顔で応じておく。
「宮原に一報入れておくだけだよ。俺からの推薦となれば面白がって受け入れてくれるはずだからな」
「そこで現場からの評価が低過ぎると問題になるというわけか？」
「まあ、そんなところだ」
　俺とマドカの意見を聞いて隊長は作成中の評価レポートを消去した。それから手慣れた操作でメールを作成し始める。作業をこなしながらマーキスは不躾な質問を投げかけてくる。
「不仲に見えていたんだが、どういう気の変わりようだ？」
「マドカの後頭部にペイント弾をぶち込んで笑わせてくれた礼かな」
　一瞬だけ片目を閉じて俺は少女に矛先を向ける。合図を理解したのかどうかマドカはいつも通りの口調で呟いた。
「……背後から仲間に撃たれるのは想定外」
「だろうな。実弾なら笑えないところだった」
　おどけながら俺は肩をすくめる。操作を終えたらしいマーキスが端末の画面から顔を上げた。
「必要な資料と評価レポートの雛形を送信しておいた。偽造の報告書が完成したら改めて俺に回してくれ」
「了解」
　俺は気前よく了承しておく。融通の利かないマーキスの性格を考

えれば、もっと交渉が難航すると思っていたからだ。これは似たような助言をしてくれたマドカに感謝しておくべきなのだろうが、制服姿の少女にも思惑があるかもしれないのでお互い様ということにしておこう。

「現場研修を終えたら送別会くらいしてやるか？」と隊長。

「転属前の忙しい時期にか？」

「嫌がらせが七課第一部隊の醍醐味なんだろ？」

そう言ってドレッドヘアーの大男は苦笑を浮かべる。俺はやれやれという風に肩をすくめるしかなかった。

十話

緩衝区と異なり大都会の日常はホエールインパクト前と大差がない。夜の闇を忘れさせる豪華な色彩を放つ光。射幸心を煽る建造物。歓楽街を野郎だけで歩いていれば、柔和な笑みを浮かべた客引きに声をかけられる。途上国が壊滅しようと経済的弱者が竜害に怯える日々を送ろうと世界はなにも変わらない。

夜の大都会。

正装した俺の傍らには煌びやかな衣装を身に纏ったジェシカがいる。

「ジェシカ、悪いがもうちょっと寄りかかってくれないか？」

「え、いいんですか？」

俺の要望に白銀髪の少女は見当違いな回答を返してきた。とても恋人同士に見えない腕の組み方をしていたので、こちらとしては無理を承知で見栄えするように頼んだつもりなのだが、どういうわけか嬉しそうな表情を浮かべて擦り寄ってくる。これはこれで歩き難いので新たな注文を加えることになった。

「もう少しだけ離れてもらえる？」

「あ、すいません」

ジェシカは恐縮しながら体勢を整える。だから俺は他愛もない世間話を装いながら直球を投げることにした。

「いえいえ、本来なら俺と千秋が組む予定だったからな。謝らなければならないのはこっちのほうさ。というかマーキスの風貌が潜入に不向き過ぎるのが大問題なんだよ。もう少し平均的な容姿をしていてくれたら俺の負担も減るんだけどね。あ、それと聞きたいことがあるんだけどジェシカって俺のこと好きなの？」

「はい」

笑顔で即答された。長広舌を突っ込まれることのなく、罵詈雑言が返ってくるわけでもない。こういう場合は軽口を叩いておいたほ

うがいいだろう。
「抱かれてもいいくらい好きだったりする？」
「うーん、そうですね。でも、いきなりは嫌ですよ？」
白銀髪の少女は屈託のない表情で応じてくる。どうやら正常な思考を持っているらしいが、それでも俺を好きという時点で常識が破綻しているのかもしれない。
「どうかしたんですか？」
ジェシカが俺の顔を覗き込んでくる。人種独特の妖艶さもあって、幼さの残るマドカと同年代に見えない。しかし今は眼前の少女より任務に集中すべきだろう。それに好意を抱いてくれる女の常識を疑うこと自体が無意味な思考だ。
「いや、なんでもない。まだ時間はあるが目的地へ向かおう」
夜の歓楽街を歩きながら怪しまれないように仲のいい恋人を演じる。ジェシカは聞いてもいないのに俺の魅力について語り始めていた。ややあって最終的な結論を告げられる。
「怜司さんの顔が好きなんです」
褒められた俺としては構わないが、大抵の場合、容姿が好きというのは禁句じゃないだろうか？　好感度を意識すれば性格や趣味が合うなど無難な回答はいくらでも存在する。わざわざ容姿で選んでいると宣言する必要はないだろう。
「整った顔立ちをしているのに幸せな雰囲気を一切醸し出さないところが素敵なんです」
「ん？　それって好意的に受け取っていいのか？」
「ああ、表現が悪かったですね。すいません。上手く言えないんですけど陰のある美形が好きなのかもしれません」
俺は空いてる右手で白銀髪少女の額を軽く突いた。もちろん疑似恋人を疑われないための演技だが、それとは違う感情が含まれていることも否定できない。しかしそれは傍らにいるジェシカに対する気持ちではなかった。
不幸顔が好きなの――確かあいつもそんなことを言ってたな。

「幸せになれない女の典型だな」
「そんなことはありませんよ。ほかの人から見れば不幸でも、本人が満足していれば幸せじゃないですか？」
俺の指摘に白銀髪の少女が反論してくる。それならこちらも正論で攻め切るまでだ。
「それこそが幸せになれない女の常套句だよ」
「うーん」
ジェシカは困ったような表情を浮かべる。ややあって少し重い話を展開した。
「わかってもらえないかもしれませんけど、不幸になりたくて不幸になれたら幸せだと思うんです。すごく矛盾していることはわかっているんですけど、望み通りの結果になることは悪いことじゃありませんよね？」
「ジェシカは不幸になりたいのか？」
「そういうわけじゃないんですけど、これまでの人生を振り返ると、なぜか幸せが現実的じゃない絵空事のように思えてしまうんです。幸せなんかになれるわけがない。うーん、違いますね。幸せになれないんじゃなくて、幸せになるのが怖いのかもしれません」
振り返るにしては随分と短い人生だとは思わない。十代の一年が大人になってからの十年よりも価値があることは理解している。しかしそれでも並んで歩く少女の考えが正しいとは思えない。
「幸せが怖いから不幸でいいなんておかしくないか？」
「厳しいですね」
そう言って白銀髪の少女は絡めた腕を解放する。一瞬だけ任務放棄の四文字が脳裏を掠めたが、すぐさまそうではないらしいことを理解した。視界に目的地であるカジノが映り込んでいる。
「ジェシカ」
「なんですか？」
少し前方を歩く白銀髪の少女が振り返る。
「幸せの青い鳥は自宅にいるらしいよ」

「それなら怜司さんも幸せになれますね」
俺は盛大に苦笑するしかない。幸せが実は身近な場所にあったなんて、そんなのは子供騙しの童話でしか許されないことだ。現実は努力に努力を重ねても幸せになれるとは限らないし、なにより頑張れば報われるなんて嘘っぱちだと思い知らされている。それでも幸せになることを拒絶してしまうのは間違っているだろう。しかしまあ、今の俺にそんなことを言える資格はない。

煌びやかな装飾で彩られた室内と、それに見合う服装を身に付けた上流階級の客人。貸切の催しとあって普段よりも多めに黒服が配置されている。俺とジェシカは青年実業家とその恋人という設定でカジノに潜入していた。
「どうしましょうか？」
「動きがあるまで適当に過ごすしかないさ」
俺は黒服から受け取ったシャンパンを飲みながら答える。諜報部の内偵によれば近々どこかのイベントで竜の密売が行われるということだった。そんなわけで現在七課は全部隊総出で潜入捜査に当たっている。いわゆる片っ端から潰していくローラー作戦なので、確率的に今日ここでバイヤーを確保できる可能性は極めて低い。
「もし動きがあった場合はどうしましょう？」
「ここで証拠を押さえられれば最高だが、まあ、向こうも警戒しているだろうから難しいだろうね。購入者を対象に場所を変えることになるかもしれないし、もっと別の方法で売買を成立させるかもしれない」
「丸腰で敵の巣に案内されるのは嫌ですね」
想像力を働かせたのか白銀髪の少女は眉根を寄せた。俺は飲み干したシャンパングラスを弄びながら最も的確な指摘をする。
「だからこそ七課が潜入任務に当たってるんだよ。つまり帰って来なければ帰って来なくても構わない人材というわけさ。もっとも世間の目があるから階級の特進と補償金は保証されてるけどな」

「さすがにそれは笑えませんよ」
ジェシカが苦言を呈してくる。ふむ。二人だけで行動するのは今日が初めてだが、どうやら仲間といるときは素を出さないようにしているらしい。
「仲間に対して猫被りは感心しないな。いざというとき意思の疎通に齟齬が生じるかもしれない」
「そうじゃありません。いつもの私が素で今日の私は少しだけ背伸びをしている感じなんです」
もじもじと白銀髪の少女は身体をくねらせる。
「それなら肩の力を抜いたほうがいい。ただでさえ精神に負担のかかる任務なんだからな」
「……」
「返事は？」
「はーい」と投げやりな声が返ってくる。
ちょっと拗ねたような仕種を見せながら白銀髪の少女はルーレット台の方へ近付いていく。長時間突っ立ってるだけというわけにもいかないので、二人分の特別経費として二十万ほど支給されている。あくまで余計な負担を強いないための配意なので、万が一勝ち分が出ても全額没収されてしまう。つまり経費が溶けようが増えようが俺には関係がないわけで、ジェシカが初体験のギャンブルを心待ちにしているお転婆な恋人を演じてくれるなら問題はない。
俺は現金をチップへ交換してくれるよう黒服に頼んでから少女の背中を追いかけた。どうしてハウスエッジ（店に有利な仕組み）の高いルーレットに人気があるのかわからないが、二つある台の周辺はどちらも盛況のようで、大勢の見物人と参加者が集まり賑わっている。特に優秀なスピナーが球を放り込んでいる場合、その姿を一目見ようと台に客が群がる光景はよくあることだった。
「ルーレットにするのか？」
俺は興味深そうに台を見つめているジェシカに声をかける。自腹なら猛反対するところだが経費なので気にしない。むしろカードゲ

ームなどに生じる煩雑なルール説明を省けるのでありがたいくらいだ。

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

白銀髪少女の視線はスピナーに向けられている。先を辿ると白と黒を基調としたゴシックロリータ服に金髪ツインテールの女が球を回していた。それは飽きるほど見知った顔で、双子の姉か妹でもいない限りシェリル本人だろう。俺はジェシカにしか聞こえないよう耳元で忠告する。

「知り合いだと黒服に勘付かれないようにな。詳しくは俺にもわからないが、おそらく潜入先の派遣先がここだったんだろう」

「ひゃん」と可愛らしい悲鳴を上げる少女。

「……大丈夫か？」

「あ、はい、急に耳元で囁かれたから驚いただけです」

そんな台詞を平気で口にするジェシカだった。本来なら台を移動するか別の遊技に変更するべきだろう。しかしこの衆人環視の中でシェリルがどういう腕前を披露するのかも気になるところだった。

「お待たせ致しました」

黒服が頼んでいたチップを運んでくる。俺とジェシカはそれらを均等に受け取り賭けに参加することにした。ルーレット台が回転して、その後に球が投入される。大勢の注目を集める中で球は徐々に速度を落としていく。普通なら台の状況も把握していないうちから賭けたりしないのだが、今回は特別なのでミニマムレートに従い最低限必要なチップを一点賭けする。当たれば三十六倍になるが当選確率は三十八分の一しかない。白銀髪の少女は概ね二分の一で当たる赤か黒の赤に賭けていた。

「ノー・モア・ベッド」

ここからは賭けられないというお決まりの台詞が告げられる。台の回転も遅くなり目で数字を追える速度になった。ほどなくして完全に力を失った球が「七」と書かれた場所に落下する。次の瞬間、周囲が大歓声を上げた。なぜなら俺が一点賭けした数字だったから

である。シェリルがこちらを向いて穏やかな笑みを浮かべた。
どうやら俺たちの存在に気付いていたらしい。ちなみに「七」は赤なのでジェシカも配当を受けている。玄人が素人から金を巻き上げる場合、最初わざと負け込んで「レートを上げよう」と持ちかけるらしい。そして欲に目の眩んだ素人が条件を受けたところで一気に沈めるわけだ。小さいレートで地味に削るより遥かに効率がいい。しかしそれは個人対個人の話で、個人対カジノという状況では成立しないだろう。放っておいてもカジノがハウスエッジ分だけ勝つ仕組みなのだから、わざわざ特定の誰かから集中的に巻き上げる必要性がない。むしろ勝てば必ず負かされるというような噂が立つことを危惧する立場だろう。
それからは一進一退の繰り返しだった。ジェシカは常に赤か黒の二択にしか賭けないので、俺は台の特徴や癖に合わせて落ちそうな場所へ小額を散らしていく。勝つ気がある賭け方ではないし、実際に勝敗への興味は正直皆無だった。
「ノー・モア・ベッド」
その指示に従いながら俺は竜売買の現状について思考する。企業の研究材料や金持ちの飼育目的で購入される場合が全体の九十九パーセントを占めていた。残り一パーセントも当事者死亡などの理由で事実確認ができなかったに過ぎない。つまり現状竜を欲しているのは社会的に成功している連中で、堕落者から一般人まで幅広い購入層を持つ麻薬とは一線を画している。しかしそれは当たり前のことだ。購入費用に膨大な差があるだけでなく、竜の場合は購入後の保管場所が必要になってくる。
急にカジノ内が色めき立った。大勢の客が歓声を上げながら移動していく。その先にはポーカーの遊技代が設置されている。どうやらカジノ側と参加者が高額レートで勝負する催しが始まるらしい。ミニマムベッドが三百万、最終的に億単位の金が動く見せるための賭博だ。
ほとんどの客がポーカーの遊技台周辺へ移動、またはその様子が

映し出された巨大モニターを眺めている。役目を終えたらしいシェリルは一礼して立ち去っていく。俺は傍らのジェシカを促して映像の見える位置へ移動した。

「外れですかね？」と白銀髪の少女が首を傾げる。

「確率から考えれば順当な結果だよ」

俺は黒服の運んできたシャンパンを一気に煽る。口当たりは柔らかく香りも悪くない。しかし胃を焼くような刺激を欲する俺には少々物足りない代物だった。白銀髪の少女が小声で耳打ちしてくる。

「任務中に飲み過ぎじゃないですか？」

「酔わないとやってられない仕事だからな。そんなことより画面に注目したほうがいい。なにやら面白いことになりそうだ」

ジェシカは視線を上げて驚愕した。画面にはディーラーの一人としてシェリルが映し出されている。苦笑する俺に白銀髪の少女は不安そうな表情を見せた。

「大丈夫なんですか？」

「なにをやらしても一定の水準まで一気に伸びる奴っているだろ？」

「大した努力もしてないのに結果を出す人ってことですか？」

「まあ、そんなところだ。しかしそういう連中は一定の水準まで他者より成長が早いだけで、元来の天才には勝てないし、努力を積み重ねてきた連中にもいつかは追い抜かれてしまう」

「あ、それはなんとなくわかります」

同意しながらジェシカは首を何回か縦に振った。

「シェリルはそういう連中の上位版なわけさ。なにをやらせても短期間でその世界のトップクラスにまで登り詰めることができる」

「……まさか？」

疑問の眼差しを向けてくる少女に俺は告白する。

「本人曰く三次元が二次元に勝てるわけがないそうだ」

「……なにかの暗号ですか？」

「それは俺にもわからない」

「でもそれが本当なら上層部が放っておかないんじゃないですか？」

「一課に配属されそうになったとき『一課には二次元が足らへん』と断ったらしいぞ。ちなみに七課第一部隊に懐いているのは千秋のおかげらしい。よく『千秋姉様の美脚は二次元レベル』と言っているからな」

「……」

完全に言葉を失っているジェシカに俺は先輩として宣言しておく。

「雑談はここまでにしよう。そろそろゲームが開始されるみたいだ」

十一話

部屋の中で光に照らされている場所は壇上だけだった。ほかは薄暗く少し離れれば顔を認識することもできない。それゆえに視線は自然と壇上へ向けられた。その先では妖艶な黒革ボンテージに身を包んだ絶世の美女が嗜虐的な笑みを浮かべている。怖ろしく露出が多い格好なのに手と足は肘まである革手袋と膝上まである革長靴で覆われていた。それが逆に胸の谷間や太股の魅力を際立たせているのかもしれない。後ろを振り向けば背中から尻まで拝むことができる。

「どうして僕がここ担当なんですか？」

「涼に青年実業家を演じさせるのは無理があるし、俺がジェシカの恋人というのはもっと無理があるからだ」

完璧な正論に返す言葉もない。しかし愚痴くらいは零しても構わないだろう。

「それにしても……あんまりですよ」

マーキスさんの言い分もわからなくはないのだけど、こういう場所へ客としてやってくるという設定にも充分無理があるだろう。壇上では蠱惑的な化粧を施した美女が舌舐めずりをしている。そこへ運ばれてきたのは豚としか表現できないような中年男だった。全裸に近い身体は弛んだ肉の塊に覆われていて、拘束用に装着させられた革帯が見苦しさを倍加させている。

ボンテージ姿の美女は複数用意された鞭から最初の一つを選んで中年男に振り下ろした。苦鳴は填められた玉口枷によって封じられている。美女は次々と得物を持ち替えながら暴虐の限りを尽くしていく。中年男は滝のような汗を滴らせながら悶絶している。薄暗い観客席からは咆哮に近い歓声が上がっていた。

「本職よりも本職っぽく見えるのは僕だけですか？」

「俺に聞くなよ」

隣席から呆れた声が返ってくる。中年男を鞭で叩いているエキゾチックな美女こそが第一部隊の狙撃手――天宮千秋さんなのだ。言うまでもなく急遽追加された潜入先はＳＭクラブである。

「とても竜の密売とか行われる雰囲気じゃないですよね？」

「だから俺に言うなよ」

隊長も店内の様子に辟易しているようだった。しかしそれにしても壇上の千秋さんは乗り乗りである。もし本質的に他者を嬲るのが好きならともかく、これがすべて任務のための演技だとしたら潜入捜査の鑑だろう。

壇上では美女が豚のような中年男を鞭で打ち続けている。その光景に興奮を覚えるのか観客席からは歓喜の声が止まなかった。ほかの連中からすれば僕とマーキスさんが異質なのかもしれないけど、こちらとしては壇上で繰り広げられている行為で盛り上がれるほうが不思議である。

しばらくすると千秋さんが下がって別の美女が姿を現した。僕と隊長はどちらからともなく顔を見合わせる。口に出さなくてもここから早く出たいという気持ちは同じだろう。

「どうしましょう？」

「とりあえず千秋と合流しよう。一緒なら裏方に進入できるかもしれないし、なによりこういう趣向の連中が竜に興味があるとは思えないからな」

「同感です」

そんなわけで僕とマーキスさんは席を立った。足早に移動して関係者以外立入禁止と書かれた扉へ向かう。事前に打ち合わせていたわけではないのだけど、こういう場合、控え室へ繋がる道で待ち伏せておくのが常套手段だろう。

「ん？」

案の定、千秋さんが姿を現した。元来の美貌に蠱惑的な化粧と露出の多い服装が加わると半端じゃない妖艶さである。戦闘時や普段の気だるそうな姿を知らなければ、とても直視できないような神々

しい雰囲気を醸し出していた。
「会場の雰囲気に馴染めなくてな。可能なら裏方に案内してほしいんだが？」
「ああ、それなら控え室に来ればいいよ。それぞれに個室が与えられているから、ほかの女王連中と顔を合わせることもない」
「それは助かる」
美女を先頭に僕とマーキスさんは関係者以外立入禁止の扉を抜ける。細長い通路を進んでいくと部屋が連なっている場所へ出た。その一室に「天宮千秋様」と書かれた紙が張り出されていた。
「楽屋みたいですね」
「まあ、似たようなもんじゃないかな」
他愛ない会話を交わしながら控え室の中へ移動した。小綺麗な室内は四畳半くらいの広さで、四辺の一つは巨大な鏡で一面を占められている。千秋さんは鏡の前に設置された椅子に腰を下ろして化粧を落とし始めた。マーキスさんが奥の座敷に上がったので僕も追従しておく。
「ところでそれらしい動きはあったわけ？」
美女が鏡を見つめたまま質問を投げかけてくる。
「まったくないな。そもそも女が男を虐げる行為を楽しんでいる連中が竜に興味があるとは考え難い」
「先入観を持つのはよくないことですけど、この一件に関しては僕もマーキスさんと同じ意見です」
「無駄足というわけね」
化粧を落とし終えたらしい千秋さんがこちらを向いて溜め息を漏らした。マーキスさんは普段の顔に戻った美女に労いの言葉をかける。
「任務とはいえ無理をさせてすまない」
「思ったより楽しめたから問題ないよ。肥満男を怜司だと仮定してからはアドレナリン全開だったからね」
「千秋と怜司を派遣すればよかったな」と隊長は苦笑する。

「まあ、そうするとカジノへ回す人員がいなくなるけどね」
ここでふとマーキスさんは暗い表情を浮かべた。
「悪かったな。どうせ俺はマフィア絡みの役しか演じられないさ」
「いやいや、ほかにも熊殺しの異名を持つ格闘家とかならいけるよ」
あたふたと言葉を紡ぐ千秋さんだった。とりあえず突っ込むしかないだろう。
「それフォローになってませんよ」
閑話休題。
「しかし実際問題、竜の密売なんて簡単に行えませんよね？」
「当然だ。対策局より先に竜の子供を発見することは容易くても、それを捌く相手を見つけるのも売買成立まで確保しておくことも容易じゃない」
「これまで明るみに出た密売事件を整理すると、普通は企業や富豪に依頼されてから竜の捕獲に向かうみたいですよね？」
「それが一番確実だからな」
「しかし今回はそうじゃありません」
僕は言葉を区切り思考する。あらかじめ竜を確保しておくメリットとデメリットについてだ。メリットは売買成立の確率が高まることだろう。注文してから何ヶ月も経つと状況が変わるかもしれないので、買い手は神経質なくらい慎重にならざるを得ない。この現象を和らげる効果は充分に期待できるだろう。しかしデメリットとして前述したマーキスさんの言葉がそのまま当てはまる。
「竜の密売組織が巨大化したのかもしれないな」
「そんなに需要があるんですか？」
「どうだろうな」
隊長は曖昧な言葉を残して腕を組む。代わりに回答してくれたのは千秋さんだった。
「対策局が発見すれば一部を除いて殺処分だからね。しかもその一部は対策局の研究に使われるから、民間企業や個人へ回されることは万が一にもない。だからこそ生きた竜は金のなる木になるわけさ」

「随分と知ったような口の利き方だな」
「まあ、怜司の話の受け売りだからね」
マーキスさんに煙たがられた千秋さんは肩をすくめる。しかし謎は深まるばかりだった。需要と供給の問題だけではなく、やはり事前に竜を確保しておく理由がわからない。メリットがデメリットを上回るとは考えられないからだ。
着信が入ったのか隊長が胸元から携帯を取り出す。表示された名前を確認して顔を顰めるものの、そのまま電話に出ないというような暴挙は犯さない。しばらく定型文が飛び交ったあと音声が拡散される操作を施した。
「シェリルが大物と接触している。そっちに見込みがないなら増援を寄越してくれないか？　なにか起こったとき俺とジェシカでは処理できない可能性がある」
隊長が僕と千秋さんの顔を一瞥する。ややあって電話口へ疑問符を投げかけた。
「誰がほしい？」
「理想は千秋だな。カジノの雰囲気に溶け込める狙撃の専門家をほかに知らない。それに女なら俺の偽名を告げるだけで簡単に入店できるはずだ」
「千秋、行けそうか？」
マーキスさんが美女に問いかける。千秋さんは手をひらひらさせながら否定した。
「無理だ。最後にもう一度舞台に立つ必要があるからね」
「だそうだ。次点の候補は？」
「女の趣味を疑われそうだがマドカだな」
「マドカは別部隊の援護に出ている。話を通すにしても時間がかかるぞ？」
「わかった。多少の不安は残るが二人でやってみるさ」
通話を終える直前、背広姿の大男が電話口に告げる。
「ちょっと待て。そんなに俺では不服なのか？」

「カジノ側から余計な警戒をされたくないんだよ」
横暴に聞こえる発言も、今回ばかりは的を射ていた。注目を集めるのではなく、マーキスさんは警戒されるのである。隊を指揮する長としての厳格さも、それらを知らない連中からすれば威圧感でしかないからだ。
「ここは怜司に任せておけばいいんじゃない？」
美女に促されて隊長は妥協する。
「仕方ないな。幸運を祈ってる」
「そんなことはしなくていい。事が上手く運んだ暁には酒でも奢ってくれ」
「ああ、それくらいなら引き受けてやるさ」
そして通話が終了する。意図しなくても控え室は緊張に包まれた。
「どうも落ち着かないな」
マーキスさんが携帯を元の場所へ戻しながら本音を漏らした。救援の連絡を受けてなにもできなかったのだから、いろいろな感情が湧き起こって冷静になれないのは当然だろう。煙草に火を付けた千秋さんが一服してから言葉を紡いだ。
「怜司に任せて悪い結果になったことなんてないだろ？　普段はともかく任務に関する状況判断は七課で一番冴えてるよ」
紫煙を吐き出しながら美女は戦闘中のような鋭い眼光を隊長へ向けた。マーキスさんは大げさに肩をすくめて首肯する。
「確かにその通りだ。俺たちは俺たちの仕事に専念することにしよう」
それから他愛ない世間話をしているうちに任務終了となった。もちろんＳＭクラブで竜密売の取引が行われた形跡はない。駐車場へ到着するとマーキスさんはコインを取り出しながら千秋さんに問いかけた。
「どっちだ？」
「表」
直後にコイントスが行われる。軽く舌打ちをしながら隊長は車の

運転席へ乗り込む。僕は後部座席を選択。賭けに勝利した美女も助手席ではなく後部座席に乗り込んでくる。ゆっくりと始動した車は真夜中の街を駆けていく。対策局へ引き上げる途中、千秋さんが怜司さんに連絡を入れた。しかし繋がらないのか呼び出し音が虚しく鳴り響いている。

「今から救援に向かいますか？」

僕の問いに美女は首を左右に振った。

「いや、それは得策じゃない。携帯に出れないってことは誰かと接触している可能性が高いからね。私たちが駆けつけることで立場を危うくさせたら元も子もない。任せると決めたら最後まで信用するしかないわ」

「最悪の場合は緊急用の連絡が入る仕組みになっている。だからそうなるまでは下手に動かないほうがいいのさ」

車を運転しながらマーキスさんが補足説明を加える。大きな国道へ出ると車は速度を上げていく。ふと見やると千秋さんは窓の外へ視線を向けていた。

「時間も時間だからな。このまま自宅へ送ってやろうか？」

「いや、私は対策局に泊まるからいい。なにか起こったときに行動しやすいからね」

ぼんやりと遠くを眺めたまま美女は即答する。なんだかんだ言ってもカジノに出向中の仲間が気になるのだろう。だから僕も宣言することにした。

「僕も対策局に残ります。役に立てるとは思いませんけど、緊急事態なら雑用係も必要ですよね？」

「わかった。対策局へ戻ろう」

マーキスさんはアクセルを踏み込んで車を加速させる。

七課に与えられた仮眠室は二部屋あるのだけど、特に男女別に設けられていないため、泊り込む当事者間で部屋割りを行う習わしになっていた。これは当直のほとんどが男性であることに配慮したもので、つまり一部屋が満員なのに対して、もう一部屋は誰もいない

空室という状況を避けるための工夫である。
「部屋割りはどうしましょう？」
「俺は雑用を済ませたいから二人で決めてくれ」
そう言ってマーキスさんは第一部隊の職場へ向かう。仮眠室前に残された僕は千秋さんに改めて確認する。
「どうしましょう？」
「一緒の部屋にしましょう」
さらりと告げる千秋さんだった。うーん、この人は魅力的な女性であるという自覚がないのだろうか？　僕が戸惑っていると美女は悪戯な笑みを浮かべて言葉を付け加えた。
「強引に童貞を奪ったりしないから安心しなさい」
「なっ――」
驚愕とともに僕は言葉を失うしかない。黙っていれば綺麗なお姉さんという呼び名は、やはり過激な発言が多いからこそ名付けられたのだろう。僕はその場を逃げ出すように仮眠室へ飛び込んだ。簡易ベッドが五台と雑魚寝用の座敷が広がっている。僕は床より高くなっている座敷に腰を下ろした。
「ちょっと悪ふざけが過ぎたみたい。機嫌を直してくれないかしら？」
千秋さんは仮眠室の扉に手をかけながら謝罪の言葉を口にする。こういうところは素直というか、後腐れのない性格をしているんだよな。僕が「もう気にしていません」と告げると、美女は髪を掻き上げながら入室してベッドに腰を下ろした。
「どうも待たされる身は苦手なのよ」
そう語る千秋さんの瞳は憂いを帯びていた。少し重たい空気が仮眠室を包む。僕は部屋に設置されている冷蔵庫を示して問いかけた。
「なにか飲みますか？」
「ミネラルウォーター」
僕は腰を上げて冷蔵庫からペットボトルを取り出す。それをそのまま美女へ向けて放り投げた。受け取るのを確認してからオレンジ

ジュースを手に取る。次いで封を切って口へ運ぶ。適度な糖分が疲れた脳を活性化してくれる。

「さっきの話ですけど……なにかあったんですか？」

深夜という時間帯がそうさせたのか僕は柄にもない質問をしていた。

「ああ……兄貴が対策局の討伐部に所属していたときの話さ」

過去形というだけで哀しい出来事が想像できてしまう。千秋さんはミネラルウォーターを一口飲んでから語り始めた。

「いい兄貴だったんだけどさ。どうにも正義感が強過ぎて、優先順位を間違うことが多かったんだよ。全員を助けようとすれば全員を助けられなくなる場合もある。どんな逆境も努力と根性で乗り越えられるのは映画の中の主人公だけだと理解できなかったんだろうね」

「……千秋さん……」

「おっと、暗い話はこれで終わりだ。今度は涼の話を聞かせろよ」

唐突に美女は話の矛先を向けてくる。しかしこの場合、それに従っておくべきだろう。僕は軽く肩をすくめながら了承した。

十二話

富豪を招いてのポーカーは主催者であるカジノ側の勝利で幕を閉じた。そしてその罪滅ぼしでもするかのように挑戦者をＶＩＰ専用の上階へと案内する。俺は未だ興奮覚めやらない連中を掻き分けながら進んでいく。背後からジェシカの戸惑うような声が聞こえてきた。

「どこへ行くんですか？」

「なにか起こったときの準備工作だ。どう考えても俺たちが上階へ招かれることはないからな」

俺は小声で質問に応じながら足早に移動していく。その速度に合わせて白銀髪の少女が後ろから付いてくる。出口で黒服が一礼してきたので会釈を返しておく。その流れで建物の密集によって生まれた路地裏へ向かう。

「こんなところでなにをするんですか？」

遅れて迷い込んできたジェシカが疑問符を投げかけてくる。俺は白銀髪の少女を素早く引き寄せて抱き締めた。そのまま顔を寄せて唇を奪う動作に移る。

「――――っ！」

大きな瞳を丸くしてジェシカは声にならない悲鳴を上げた。もちろん本気で唇を奪うつもりはない。俺は濃厚なキスシーンを演じながら白銀髪の少女に囁いた。

「カジノ側の警戒心をできるだけ下げたい。路地裏で情事に及ぶ馬鹿な恋人をもう少しだけ演じてくれ」

「それって……誰かに見られているってことですか？」

少女の蚊の鳴くような声が返ってくる。平静を装っているが内心穏やかではないだろう。しかし俺は冷静な分析結果を報告することしかできない。

「明らかに慌てた様子でカジノを出てきたわけだろ？　俺が警備に

当たっていたら様子くらい窺うだろうからな。それともう一つ、人目を避ける場所へ飛び込む理由がほしかった」

意味がわからないのか白銀髪の少女は目を白黒させた。俺は豪奢な衣装を示しながら補足説明する。

「闇に乗じて動くには目立ち過ぎるだろ？　さてと馬鹿な恋人を演じるのもここまでかな」

俺はジェシカを道路から見た死角へ連れ込む。そこで改めて携帯を取り出し連絡を入れる。

「ネレス道り駐車場にピザを頼む。サイズはMでトッピングはシーフード系のおすすめをあるだけ乗せてくれ」

傍らに立つ白銀髪の少女が小首を傾げた。言外に「そんな隠語ありましたっけ？」という疑問が含まれている。

「とりあえず移動しよう」

俺はジェシカの手を引いて路地裏から出た。無意識を装いながら周囲を確認しておく。それからカジノに面したネレス通りへ向けて歩き始める。夜でも明るい通りを一瞥すると一台のバンが停車していた。

「ふむ」

相変わらず仕事が早いことに感心しつつ俺は白銀髪の少女を連れて車に乗り込む。次いで座席の下に張り付けられた鍵を取り出してエンジンを始動させる。

「えーっと？」

困惑するジェシカに俺は状況を説明した。

「これは対策局の手配じゃなく俺個人が利用している便利屋の仕事だ。ちなみに車内は妨害電波が流れているから通信傍受の心配もない」

「なるほど……ちょっとしたセーフティハウスになっているわけですね」

「まあ、そんなところだ。それより後ろに移動して着替えてくれないか？　助手席でその衣装は目立ち過ぎるからな」

「あ、はい」
白銀髪の少女は服装を確認して首肯する。俺は機器を操作して助手席の背凭れを後ろに倒した。ジェシカは仕切りの黒布を抜けて奥へ引っ込んでいく。
「さてと」
俺は礼服を脱ぎながらカジノのＶＩＰ階を見上げた。屋上から回転翼機でも使われない限り追跡は可能だろう。不意に黒布から顔を覗かせた白銀髪の少女は小首を傾げる。
「得物はどうしますか？」
「標準的な自動式拳銃はあるか？」
「これなんてどうです？」
言いながらジェシカは漆黒のベレッタを手渡してきた。俺は肯定して受け取り帯革に差し込んでおく。諜報部の言葉を鵜呑みにはできないが、もし本当に竜の売買が行われるなら、仲介役としてカジノを利用する可能性は高い。大金を持ち込んでも不自然な場所ではないし、なにより上客を演じることで専用の遊技場へ案内してもらえる。深夜の港倉庫で売買契約を交わすより安全で確実な方法だ。
そんな思考を張り巡らせていると携帯が震え始めた。俺は視線をカジノに残したまま電話口に告げる。
「任務中だ。野暮用なら今度にしてくれ」
「その任務が新たに舞い込んだ。現場へ向かうために操縦士を借りたい」
マーキスの発言に俺は素っ頓狂な声を上げた。
「はあ？　来月までこの時間帯の持ち回りは六課じゃなかったか？」
「その派遣部隊に参加しているマドカからのご指名だ。ジェシカと千秋の交代は可能か？」
「ああ――今なら可能だ」
俺は端的に応じてジェシカの名前を呼ぶ。再び黒布から顔を出した白銀髪の少女に事情を説明する。黒一色の戦闘服に着替えたジェシカが助手席に移動してきた。

「これから対策局へ戻れってことですか？」
見慣れているせいなのか、こちらほうがしっくりくる。俺は道路を駆け抜けていく旅客車を一瞥してから応じた。
「そういうことになる。この通りなら足に困ることはないだろう」
「わかりました。無理はしないでくださいね」
そう言うと白銀髪の少女は薄手の上着を羽織って車を降りる。その勢いで旅客車を呼び止めて飛び乗った。傍目からすれば恋人同士の痴話喧嘩にしか見えないだろう。
「まったく……今回の新人は半端ないな」
俺は嘆息を漏らしながら張り込みを再開する。しばらくすると改めて携帯が震え始めた。出ると電話口から聞き慣れた美女の声が零れる。
「カジノに到着した。どこにいるんだ？」
「ネレス通りの路上駐車場だ。後部座席が全面スモークフィルム仕様のバンを使っている」
「了解」
短く答えて千秋は通信を切った。ほどなくして助手席の扉を叩く音が聞こえる。鍵を解除すると軽装の美女が車に乗り込んできた。
「首尾は？」
「なんとも言えないな」
俺は正直な感想を述べておく。仮にカジノが竜の売買に関わっているとしても、都合よく尻尾を掴める可能性は低いだろう。ほんの少しでも新たな情報が入手できれば上々の結果だ。
「そっちの任務はどうなんだ？」
「救援要請の理由が予備弾薬の不足らしいからね。誰を派遣したところで大差はないよ」
言いながら千秋は後部座席へ上半身を突っ込む。しばらくすると大口径ライフルを持ち出してきた。高性能な消音装置が付いた暗殺用の銃である。
「改造してあるのか？」

「ああ――俺の好みをよく理解している便利屋がいるんだ」
美女の様子を窺いながらも基本的にはカジノのＶＩＰ階から目を離さない。千秋は改造銃を手に馴染ませながら話を進めてくる。
「こんな車両を用意するってことは本命と睨んでるのか？」
「いや、便利屋を利用した理由は別にある。車両一台手配するのに課長の判がいる対策局の役所仕事に嫌気が差しただけさ」
「一言で返せる質問に相変わらずの長広舌だな」
「淡泊な男より寝台の上では評価が高いらしいぞ？」
「黙るか死ね」
千秋は薬室に初弾を装填してから銃口をこちらへ向けた。冗談にしては悪ふざけが過ぎるのでおそらく本気なのだろう。美女の指先が引き金を絞るだけで俺の人生は幕を閉じることになる。
刹那――携帯ではなく緊急用の通信機が鳴り響いた。
「どうやら装備が無駄にならなかったらしい」
俺は帯革に差し込んだ自動式拳銃を抜き取る。もちろん緊急事態が発生した以上、これだけでカジノに乗り込むわけにはいかない。座席を倒して役立ちそうな得物と道具を用意する。数秒前まで銃口を突き付けていた千秋も俺と同様の行動を取っていた。
装備を整えながら俺は侵入から脱出までの経路を組み立てる。非常口あるいは隣接建物からＶＩＰ階へ強行突入するとして、脱出は下の階に降りて正面出口から済ますのも悪くない。カジノ側も一般客を射殺するわけにはいかないだろうから、人混みに乗じて安全地帯へ退避できる可能性は必然的に高くなる。
テロリストやマフィアは血と硝煙の臭いが好きな連中を抱えているものだが、そういう輩が表舞台のカジノに配置されることはまずないだろう。大抵の場合、裏方の汚れ仕事を任されるからだ。つまり遭遇するなら警備としてではなく追跡者としてだろう。
準備を終えた俺と千秋は経路の確認だけ済ませてカジノの非常階段へ向かう。もちろん誰でも利用できる仕様にはなっておらず頑丈な錠前が施されている。俺は量を調整したプラスチック爆弾を張り

付けて起爆装置を押す。鈍い爆裂音が響いて強固な鉄の塊が溶解する。美女が扉を蹴破り階段を登っていく。俺も自動式拳銃を構えながら追従する。おそらくこの時点でカジノ側に異常事態が知れ渡っていることだろう。ゆえにここからは時間との戦いにもなる。

ＶＩＰ階まで一気に駆け上がった千秋はプラスチック爆弾を扉の錠前に付着させる。俺は周囲と後方を警戒しながら起爆を待つ。爆破と同時に美女が扉を開け放った。俺は素早く銃口を突き付けながら中へ侵入する。安全を確認してから千秋を室内へ招き入れた。

「不用心過ぎないか？」と美女。

確かに捕まれば最高刑が科されてもおかしくない竜の売買を行うには警備が手薄過ぎる。しかし緊急連絡が入ったのも事実だ。あの通信機は構造的に誤作動や誤操作の可能性が皆無に等しい。緊急を要するなにかが起こったことは間違いないだろう。

「ともかく先へ急ごう。シェリルの位置は把握している」

「罠の可能性は？」

「シェリルが緊急連絡装置について喋るとは思えないし、カジノ側の連中がたまたま気付いたなんて確率はそれこそ天文学的な数値になる」

俺の軽口を聞いた千秋は露骨に不機嫌な表情を浮かべる。しかし的を射た意見であることは理解してくれたのだろう。一つ一つの動作が突入時と同じくらい軽やかに戻っていた。

下の階に比べて随分と入り組んだ内部を進んでいく。その原因は広い遊技場と別に大小様々な個室が設置されているからだ。まるで人の気配を感じない通路を美女と背中合わせで抜けていく。目的地を視認した俺は後方に制止の合図を送った。

「部屋の前に屈強そうな黒服が二人いる」

百八十度旋回して千秋にも標的の状況を確認させる。背後から気だるげな舌打ちが聞こえてきた。その気持ちはわからなくもない。一目で違法と判断できる武装をしていれば問題ないのだが、現時点ではこちらが不法侵入者なので派手に暴れ難いのだ。

「援護は任せたからな」
そう言い残して美女は黒服へ向けて駆ける。しなやかな女豹のような動きで一気に距離を詰めた。接近する不審人物を捉えた男二人は反射的に散開する。それぞれ別方向から闖入者を取り押さえようと襲いかかった。
しかしその瞬間、黒服が違法な銃器を所持していないことが判明する。得体の知れない敵を前にして一度も銃を引き抜く動作を見せなかったからだ。つまり二人組みは真っ当な護衛で荒事を専門にしている手合いではないのだろう。
長い黒髪を振り乱しながら千秋は黒服の顎を掌底で打ち抜く。一撃を見舞われた男は脳震盪を起こして膝から崩れ落ちる。しかしもう一方の護衛に背後から羽交い絞めにされた。一瞬の判断で美女は体重を黒服に預けて身体を浮かせる。その流れを利用して護衛の足の甲に踵で着地。呻き声を漏らす男の顔面に後頭部で一撃を追加する。手を放して鼻先を押さえた黒服の側頭部を千秋の見事な後ろ回し蹴りが捉えた。
無言のまま護衛は床に倒れ落ちる。やはり街の用心棒程度では死線を潜り抜けてきた美女の足元にも及ばない。俺は身を隠していた通路から部屋の正面へ素早く移動。外の防犯設備に比べれば室内の施錠は強度が緩い。千秋は手持ちの自動式拳銃を発砲して錠前を破壊。消音装置の機能で銃声は本来の二割前後に抑えられている。おそらく十メートルも離れれば無音だろう。
俺が開放した扉の中に美女は銃口を突き付けた。
次の瞬間、女の悲鳴と狼狽した男の声が広がる。中の様子を確認して俺は嘆息を漏らすことしかできなかった。真正面の食卓で酒を交わす男それぞれの股間に若い女性が顔を埋めている。食欲と性欲を同時に充たす手段かもしれないが、その滑稽な姿はこれまで築き上げてきた緊張感を台無しにしていた。
奥へ視線を移すと寝台の上で依存性の少ない合法麻薬を楽しんでいる壮年の男と若い女。隈なく室内を調べていくと半裸に剥かれた

シェリルの姿があった。俺の存在を確認すると覆い被さろうとしていた肥満男の頬を裏拳で振り抜く。気を失った豚を脇へ退けると金髪少女は泣き真似をしながら駆け寄ってくる。もちろん向かう先は俺ではなく千秋のところだ。

「対策局竜討伐部だ。ここを仕切っている人物と話がしたい」

俺は身分を明かして銃を下げる。食卓に着いていた中年の男が勃起した股間を皿で隠しながら立ち上がった。間抜けな光景だが笑うわけにもいかない。営業許可を得ていない性的行為の提供を黙認、それから物損と黒服の見舞金を対策局が持つことで和解する。こちらが提示した条件は突入事実の忘却と対策局に対する訴訟を起こさないという二点だ。

取り引きは思いのほか簡単に成立する。痛くもない腹を探られたくはないだろう。俺が退室を促すと千秋は壁を殴打した。ここまで感情をあらわにすることは珍しい。しかしこれは対策局ではなく警察の仕事だ。どんなに理不尽でも本日の任務は強制終了となる。

シェリルが別口の移動手段を用意していたため、俺は仕方なく千秋を寮まで送り届けることになった。本来なら金髪少女が担う役目なのだろうが、その移動手段が回転翼機ではどうしようもない。

真夜中の道路を疾駆中、助手席に座る美女が呟いた。

「怜司の部屋に連れていってくれないか？」

普段なら適当に軽口を返しておくが、今の千秋を独りにするのは危険だろう。俺は肯定の意を示して進路を変更する。十数分で平凡な自宅マンションへ到着。駐車場になっている一階部分にバンを停めた。鍵を抜いて指定された後輪に貼り付けておく。これで朝になれば便利屋の回収役が運び終えているという寸法だ。

「三〇五号室だ」

俺は傍らに立つ美女に行き先を指示する。普段なら任務後の一服を吹かしているはずの千秋が、まるで煙草の存在を忘れたかのように吸う気配がない。自動昇降機に乗って二人で三階の一室へ向かう。監視や狙撃から身を守るために選んだ都会の死角。

扉を開けて１ＬＤＫの殺風景な部屋に照明を点ける。奥へ進んで冷蔵庫からペットボトルの烏龍茶を取り出して一口飲む。千秋は「借りるぞ」と告げて浴室へ向かった。俺はベッドに腰を下ろして上着を脱ぐ。それから時計を確認して仰向けに寝転がった。

午前二時十六分。

夜明けの珈琲を飲むにはまだ早いらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1112s/

絶望の扉

2011年10月11日09時55分発行